

そしてヤ●チンは愛を  
知る

林太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

秀知院学園高等部二年、西園道留！

彼は生徒会広報でありそして！

ヤ●チンである！

が！

それは彼が自分を守るための彼なりの行動。傷つかないために身に付けた処世術であることを忘れてはならない！

彼は愛に飢えていた……





## 外側

## 1

朝の光が目にかかり、西園道留は目にしぞのみちるを覚ました。まだ起きたくない。心地よいまどろみを求めて、寝返りをうつ。柔らかくて暖かいものに手が触れた。ゆつくり目を開ける。

女の腕に触れていた。女は一糸まとわぬ姿で彼の方を向き、静かに寝息をたてていた。彼女の桃色の唇を見て、道留は昨日この女と体を重ねたことを思い出す。

長い黒髪はこの女と彼は何か月前に合コンで知り合った。白いワンピースが似合  
いそうな清楚な顔して中身は肉食系だ。めちやくちやビッチである。

経験人数と何Pまでやったことがあるかを道留が聞いたことがある。そのとき女は三十人以上で5Pが最大だと笑いながら答えていた。

「あたしの口と穴が全部塞がってるとき、あまりの男どうしてたと思う？自分でしごいてたの！ウケルよね！」

そんな過激なことを言っていた彼女の顔は、道留の学校に居てもおかしくなくらいのお嬢様系美人だ。長いまつげもくつきりとしたまぶたも、茶色味がかった瞳も人工物

ではない。そんな女が性欲の権化。ちぐはぐさが面白くて、なんだかとてもいい。そんなことを道留は思っている。

そう、この女のことを道留は気に入っていた。ちゃんと彼が個人的に定義したセックスフレンドという関係をわかつてるからである。

『ムラムラしたら会って、ヤッて、お互い出すもん出して、それで終わりの関係。お互いのことを必要以上に知ろうとすることはない』

これが彼によるセックスフレンドの定義である。

体を何度か重ねたら、関係を深めたいとかなんとか言ってくる女がいるが、本当にこの子を見習ってほしいと道留は常々思っていた。

俺は貴女方をオナホと同じ目で見てるんです。わかってください。このままの関係では満足できないと言われる度に、彼はそう言いたくなる。

一度とある女にそれを正直に伝えたら、女がメンヘラと化した経験が彼にはあった。彼は女のスマホから自分の連絡先を消去してうまく逃げおさせた。セックスも下手だったし、ホントにどうしようもない女だったことを覚えている。

時計を見る。朝の九時過ぎ。学校は既に始まっている。彼は午前中をサボる決意をした。女を抱き寄せる。女がうつすらと目を開けた。

「もう一回」彼は彼女の耳元で囁いた。

「眠いから、後ろから入れて一人で振ってて」女は気だるげに言うとうつつ伏せになった。寝バツクね。彼は彼女の指示に従うため、のそりと上体を起こした。

○

ホテルを出たのが十時。着替えるために家に帰ると十時半。身支度を整え、早めの飯を食うと十一時半。学校についたのが十二時十五分。昼休みだ。

教室に行ってもつまらないだろうから昇降口からと彼はそのまま生徒会室へ向かった。

大きな木の扉の前に来ると聞き耳を立てた。白銀とかぐやの声。藤原の声も聞こえる。彼は扉を開けた。

「あ、道留くん、おはよー！」藤原が彼に気づいた。

「もう昼だけどね」彼は笑った。

「また寝坊か？」白銀が聞く。

「そう。いかんね、低血圧ってのは」彼は頭をかく。

道留はソファアームにどっぷりと体を預けて目を閉じる。とても心地いい。

「出席日数は問題ないんですか？」かぐやが言った。

自分が寝坊なんてしていないことに気づいているらしい。流石はかぐや様だ。彼は言った。

「大丈夫。ちゃんと数えてますから。このペースでいけばギリギリ足りません」

かぐやは顔をしかめた。サボるという文化が彼女にはないのだ。

「テストの成績さえよければ素行がいくら悪かろうと構わないってのが家の方針なので」その反応を見た道留は付け加えた。

「ところで」道留は言いながらチケットを二枚机の上へ置く。

「遊園地のチケット二枚当てただけで、絶叫系二ガテだし行く相手も居ないんで、だれか貰ってくれませんか？」

彼とかぐやの目があつた。かぐやの目の輝きは先程とはまるで違う。彼女は道留に向かつて本当に若干ほほえんだ。

道留がかぐや様からの心証を悪くせずにはやめてこれているのは、このように定期的に彼女に攻撃のきっかけを与えているからである。

「最近できたところですね、これ」かぐやはチケットを拾い上げて言った。「超高速のジェットコースターが売りなんですよね？」

「うん。それにお化け屋敷もあるみたい。なかなか凝ってるらしいですよ」道留は言いながらパンフレットをかぐやに渡した。



「会長はこういうの得意なんですか？」かぐやが仕掛け始めた。なにか方法を思い付いたらしい。さすがの頭脳だなど道留は感心した。後はもう彼にできることは一つだけである。

「ねえ千花ちゃん、西口にさあ、スイーツ食べ放題の店できるって話知ってる？」

それは藤原千花の制御！

藤原の天真爛漫さから来る予想不可能な言動の数々。それらは天才たちの計算を狂わせる厄介なウイルスだ。

しかしそれらは人間らしい自由な発想の賜物である！

人間は論理的思考を覚えると直線を引くように連続した思考ばかりを行うようになる。その連続こそが論理であり、成長だからだ。

しかしそれは一つの関数を追いかけているだけである！別の関数へ急に飛び移ることとはできない！

藤原の思考はデカルト平面上の点を自由に飛び回ることができるものであり、そして同時に関数を追いかけることも可能。機械には真似することができない！

そんな彼女を制御するにはどうすべきか？

確実にそして完全に制御する方法は無い。しかし大まかな方向付けをすることは可能である。

興味を引けたならば！

「えっ！初耳です！」藤原は目を輝かせた。

「なんかね、バイキング方式みたい。メニューもいっぱいあるみたいだよ」

「なんてお店ですか？」

「スイーツユートピア。略してスイピア」

「スイピア！聞いたことあります！」

「チエーン店だからね。行ったことは？」

「ないです。行ってみたいんですけどいまカロリー気にしてて」彼女はそう言ってお腹を撫でた。

「気にするような体型じゃないでしょ」道留は本心で言った。

「そうですかね〜」

「見た目で太ったってわかんないやセーフだろ。千花ちゃんは全然そんな感じしない」  
彼女はあはれな一点を除いてスレンダーである。もちろんその一点とはおっぱいである。  
たわわである。爆乳である。この子がこの学校の生徒じゃなかったら、道留はまず間違  
いなく手を出していた。

「そうですかそうですか。道留くんに言われると何だか安心しちゃいますね〜」

女に詳しい俺に言われると、ってことだろうか。道留はそう思った。あえて聞こうと

はしないけれど。

余裕が出てきた道留はかぐやと白銀の戦いに耳を傾ける。

「凄い怖いみたいですわね、お化け屋敷。私こういうの苦手なんですけど興味はあつて……」かぐやはパンフレットを見ながら言った。

「そうなのか。怖いもの見たさというヤツだな」白銀が言う。

おそらくかぐやの作戦は、ジェットコースターやお化け屋敷などに対する弱味をみせ、庇護欲をそそらせるものと道留は予想した。彼女が普段しつかりものであるがゆえに、そこに生まれるギャップは童貞を殺すレベルのもの。そう、庇護欲＋ギャップ萌え。効果は絶大である。

彼女らが繰り広げるのは恋愛頭脳戦！

自分のプライドを守りつつ、つまり自らは告白せずに相手と恋人関係になりたい。ゆえに相手を告白させる必要がある。彼らはその特異的な頭脳を用い、相手の行動を計算し、告白させんと策を編む。

道留は彼らの思惑に気づいた当初、どっちでもいいから早く告れよと思いはした。しかし、この状況もこれはこれでなかなか面白いことを発見。以来、彼らに戦いのきつかけを提供している。

白銀は迷っているようだった。当たり前のことだ。ここで飛び付けば自己に不利に

はたらき、飛び付かなければかぐやとイチャイチャはできない。

西園庶務と藤原書記を巻き込むか？しかし石上会計が落ち込むかもしれない。じゃあ生徒会全員で？いや結局藤原書記がいる場合、満足する結果には至らない可能性が著しく高い。断るといふ選択肢は？あるわけがない。

そんなことを考えているのが道留には丸分かりだった。

はよ誘えよ。面白いからもう少し続けててもらっても構わないけど。彼はそう思った。

「こういうところには本物の霊も集まってくるっていいですよ。そうしたら私、頼れる人がいないと……」かぐやは押しした。

その判断は間違っていない。ぐらついていいるなら押すべきだと道留も考える。しかし、彼女の言葉の何かが道留の頭に引っ掛かった。

彼が藤原を制御するために作成した、藤原の興味あること一覧。その中に、確か……

失態だ。彼は悟った。

「本物が出るんですか!？」藤原は彼らの話に首を突っ込んだ。

そう、彼女は最近オカルトに興味を示しているのだ。完全に道留の油断が招いた事態である。

かぐやは動揺していた。

「え、ええ。そういう話を聞いたことがあります」

「じゃあ道留くん！この二枚、わたしとかぐやさんで貰つていいですか？」藤原が二枚を手にとつて笑う。

「もちろん」彼は言った。彼には他に言いようがない。

かぐやは啞然としている。彼女も藤原の誘いを断るわけにはいかない。

道留は白銀が自分を見ていることに気がついた。懇願するような目をしているが、その自覚はきつと彼にはない。

わかつてるよ。例え二人きりじゃなくとも、だろ？

「やっぱそれ、俺らも行くわ。だろ？白銀」道留はそう切り出した。

「なら石上も誘わないとな」白銀は嬉しそうに言った。

「行きましよ行きましよ〜！」藤原がはしゃぐ。

「じゃあ白銀、オフの日教えて」

○

予定をたて終わると昼休みもう終わりそうだったので、みんな教室へ戻った。

道留はかぐやと同じ一組だ。教室に入ると男連中が、彼の遅刻を笑って指摘する。談笑に興じるほどの時間もなかったし、なんだか眠たかったので道留は自分の席に戻り、窓の外を眺めた。

体育の準備をする一年生がグラウンドに集まっていた。その中には、生徒会の後輩である石上の姿もあつた。二人組を作るとき、あいつは先生と組むのだろうか。その場面を少し見てみたい気もする。だがすぐに彼を囲む群衆の頭の悪さに気分を害され、腕を枕に机に伏した。ああいう群衆が炎上騒ぎを盛り上げたり、大戦中のドイツのようなジエノサイドに喜んで手を貸すのだろう。行動原理は全て、大衆への帰属意識だ。

これは考えていて楽しいことではなかったので、道留はまぶたの暗闇の中で何も考えないように努めた。しかしかぐやと白銀のことがカットインしてきたので、彼はその話題を取り上げる。

白銀はかぐやが好きで、かぐやは白銀が好き。相手に告らせようとするやり取りは見ていて微笑ましく、そのまま小説か何かになっても売れそうなほどキレイだ。

彼らの恋愛を道留が応援している理由は、ひとつは単なる友人の幸せを願う気持ちからだが、もうひとつは滑稽で面白いからである。

結局、彼らがしたいのはセックスだ。キレイに砂糖でコーティングしているけれど、中心にあるのは不快な臭いのする白濁した欲だ。どんなに取り繕ってもそれは揺るが

ない。この学校のトップ二人がそんなことにも気づかず、動物的で汚ならしい本能を大切に抱え込んでいるのが滑稽なのだ。道留としてはもっと素直になるべきだと主張したいくらいだ。

そして今、あの二人を、真面目に恋愛をする連中を下に見た考え方をするのは、自分の立場を正当化するためかもしれないと思に至る。それは批判しないと自分の論理が正しいと確信を持ってないということとほぼ同義であり、主観が多分に含まれているということだ。主観というのは願望と同じことである。

じゃあどうして自分は彼らの恋愛観を否定するのか、つまり、どうして否定したいのか。答えはそれが欲しいのに、手に入らないから。良くある動機だ。ブサイク男がイケメンを嫌うのと同じ動機。

つまり俺は、彼らのことが羨ましいのか？

彼はその問いかけに答えを出せなかった。あるいは出したくなかったのかもしれない。そして頭の中の大きな矛盾を許せない気持ち膨らんでいった。

ある日の放課後、西園道留は後輩の女の子に校舎裏に呼び出された。

指定された時間ぴったりにそこに行く。彼を呼び出した後輩は既にそこにいた。特徴らしい特徴は無い。素朴な感じ。しかしそれでいて顔立ちには結構整っている。典型的なお嬢様だ。道留の登場により彼女の緊張は最高潮に達したらしい。顔がみるみる赤くなって、うつむいた。

「それで、話したいことって何？」道留は優しく尋ねた。

「えっと、あの、覚えてますか？私が電車で、男の人に、その、触られてて」彼女は少しずつ話はじめた。「私、嫌だったのに怖くて何も言えなくて」

（ああ、これ、長くてめんどいタイプの告白だわ）

彼は脈絡というものにそんなに興味がない。だから要点のみを抽出して、手短かに言うてほしかった。

「それに先輩が気づいて、男の人の手を掴んで、次の駅で降りてくれて、駅員さんに何があったか説明してくれて、私不安だったんですけど先輩が大丈夫って声かけてくれたおかげで耐えられました」緊張のためか、少しおかしな日本語で彼女は言った。



「警察の聴取が長引いても先輩は嫌な顔ひとつせずにつき合ってくれて」

道留は真剣な顔をして聞いていた。断るとはいえ彼女の気持ちはしつかりと受け止めたかったのだ。

「それ以来、先輩は、廊下とかで私に声をかけてくれるようになって、それが嬉しくて」彼女の緊張は話しているうちにいくらか和らいだようだ。彼女は顔をあげた。道留の目を見つめる。

「先輩は優しくて男らしくて、それにとつてもかっこよくて、気がついたら目で追うようになっていて」

道留はもうすでに申し訳なきで一杯になっていた。

「私、先輩が好きです。付き合ってください」彼女は勇気を振り絞るように言った。

一拍おいて、道留が口を開く。

「ごめん、君をそういう目で見たことはなかったし、これから見れるとは思えない。ここだけの話、いま彼女いるしさ」優しい口調を心がけて言った。「仲いい後輩だとは思ってたんだけど、ごめんね、勘違いさせちゃったね」

彼女は目を一瞬見開いて、顔を歪めた。鼻をすすする音が聞こえてくる。やがて嗚咽混じりに何かを言おうとしはじめた。口の端がひくひくしている。

(そんな簡単に泣くかね)

道留は思ったが顔には出さなかった。代わりに少し困ったような表情を浮かべる。

「せ、先輩があ……」彼女はそこで言葉を切った。苦しそうだ。

「大丈夫、落ち着いて。ゆっくりでいいよ」道留は優しく言った。ハンカチを取り出して彼女に渡した。

そしてすぐそれが悪手だったと思い直す。その言葉と行動で彼女はますます泣き出したからだ。

彼女が落ち着くまでそこそこ時間がかかった。やがて泣かないように表情をきつと結んで話をはじめ。

「先輩が、色んな女の人と、ホテルに行ってるって、本当ですか？」

彼女の質問は、彼には予想外だった。けれど否定する理由は何もない。俺に幻滅して精神を安定させたいのならそうさせてあげるべきだ。彼はそう判断した。

「本当だよ」

「彼女がいるのに？」

「誉められた話じゃないのはわかってるよ」彼は悪びれた様子なく言った。

彼には本当に付き合っている女がいる。セフレとは別にだ。もちろんこの学校の生徒ではない。しかし道留の前に立つこの女がそれを信じたかどうかは怪しかった。

「そうですか……」彼女はそう言って、しばらくうつむき、黙っていた。驚いてはいなかつ

た。道留が遊び歩いているのをほとんど確信していたのだろう。

けれど彼女は何かを考えていて、迷っている。道留が彼女の言葉を待っていると、しばらくして決意したように顔をあげた。

「私、私の初めてを、全部先輩にあげます」彼女は道留に近づきながら言った。

「好きだなんて言わなくていいです。何番目でもいいです。けど、付き合うことができないならせめて、せめて！」彼女は道留の手をとった。

「私の体を、使ってください」言いながら彼の手を自分の胸に押し当てる。道留は、服越しに柔らかさや暖かさを感じた。彼女と目が合う。睫毛に付いた涙が光を受けてきらめいた。

「無理」彼は短く言った。手を振り払う。

(こんなに馬鹿だとは思ってなかった)

道留はこの女に呆れていた。視野が狭すぎる。自分よりいい男なんて、ちよつとこの学校を一回りすれば何人も見つかる。おとなしく振られて、新しい恋をしたらしいのに、全然周りが見えてない。

「何で、ですか？」女は聞いた。

自分の何がこの女を駆り立てているのかを道留は理解できない。

「お前さ、そのくらい自分で考えなよ」低い声で言った。お前のことが大嫌いです、とい

う表情を作った。

女はある程度ショックを受けたらしいがまだそこに立っている。目が潤んでいた。

あと一押しだ。彼は言葉を考え始めた。彼女がまた鼻をすすり出す。

私の何がダメなんですか？

たぶん彼女はそう言った。嗚咽混じりだったのではつきりと聞き取ることは、道留にはできなかった。

「鏡つて見たことある？」道留は淡々と言った。

それを聞いた途端、女は顔を歪めた。踵を返すと走り去っていった。悪手だったかもしれない。自分に不利な噂が広まらないといいけどと思う。

告白してくれたところまではきちんと扱ってあげようという気持ちがあったが、今は憤りが感情の半分くらいを占めていた。不思議だった。だから何で自分がこんなに怒っているのか考えはじめた。自分で自分がわからない。わからないと今度はそれが原因で腹が立つ。考えなくてはならない。

そしてこういう難しいことについて思考を進めるには、煙草が必要だ。

彼は内ポケットに入っている煙草の箱から一本取り出して口に加えた。臭いをつけるわけにはいかなかったので学ランを脱ぎつつ、焼却炉の影へと向かう。

そこは彼のお気に入りの場所だ。考え事があるとここに来て、問題が解決するまで何本も吸う。吸い殻は焼却炉の中に投げておけば誰かが燃やしてくれるし、何しろここには人が来ない。未成年の喫煙所としてはなかなか都合のいい場所だ。

歩きながらライターを出して、フタを開ける。このときのカシヤリという音が彼は好きだ。焼却炉の影を覗く。

先客がいた。先客がいたこと自体が意外なのに、その人物も意外だった。

「それ犯罪だよ、西園くん」早坂愛が笑った。

彼女は道留のクラスメイトだ。アイルランドの血が混ざってるらしい。めっちゃ可愛いきやびきやび系女子。当然人気が出るけれど、彼氏がいるとかいたとか、そういう話は一切聞こえてこない。つまり、たぶんかなりの面食いだと道留は勝手に思っている。

(で、こんなところで何してんだ?こいつ)

未解決問題の上に新たな問題が塗られた。

「誰かに言う?言わない?」彼はタバコを啜えたままふにやふにやと聞いた。

「言わないけどさー、体に悪いよーそれ」

「お気遣いどーも」彼は言うフリントを回して火をつけた。

息を吸って、ゆっくり吐く。頭が冴えていく。新皮質のニューロンの繋がりが意識で

きた。脳が働きはじめる。モノを考えられるようになる。

もう一度息を吸って、上を向いて煙を吐き出す。

「あの二人のこと、嫌なの？」彼は唐突に聞いた。

「え？」彼女は驚いていて不思議そうな顔をした。「あの二人って？」

「ユキとアヤネ」道留は答える。

今出した名前は早坂が仲良くしている女子二人のものだ。雰囲気は三人とも大体同じだし、早坂がずば抜けているが、皆かわいい。

「何でそんなこと聞くわけ？嫌なわけじゃないじゃん。好きだよ」早坂が強めの口調で言った。

「バイトだって嘘ついて、あいつらの誘いを断るくらいには？」

早坂がバイトで忙しく、付き合いが悪いというのは仲間内では有名な話である。実際彼も、彼女が遊びの誘いをバイトを理由に断っている会話を聞いたことが何度もあった。彼女がここで無為に時間を過ごしていることから、彼女が嘘をついている可能性へと彼は思い至ったのだ。

バイトが存在しなかったら、道留的にはそこそこ面白い。

もつとも、今日早坂がバイトを理由に二人の誘いを断ったのかどうかを彼は知らない。そもそも誘われたかどうかも知らない。

つまりこれは、賭けだ。勝てばぐちやぐちやの人間関係が見えてきて面白い。負けてもどうでもいい人間から白い目で見られるだけである。

結果は明らかだった。彼女の目付きが少し変わったからだ。

「忠告しておくけどお、それ以上この話に足を突っ込むのはやめといた方がいーよ？てか私、ユキのこともアヤネのことも好きだし」

この忠告を道留は面白がった。

「足突っ込むと、どうなるの？」道留は聞いた。

「教えなーい」彼女の声のトーンは変わらない。

なるほど、と彼は思った。具体例を挙げると隠している秘密に繋がる情報を晒してしまふことになるのだろうと判断する。忠告がはったりで、具体的な内容を聞かれてとっさに答えられなかったという可能性は彼女が偏差値七十の秀知院の生徒だから排除した。

深読みかもしれないと道留は少し思ったが、この判断を信じることにした。なぜならきつと方向性は恐らく合っているからだ。早坂が何か大きな秘密を隠していることはほとんど事実である。彼女がこんなところに居る理由を探ればその秘密が見えてくることも確かだ。

「お前、誰？」ふと疑問が口をついて出てくる。

ほとんど無意識的な発言だ。自分の描いていた早坂愛のイメージと、今話している早坂愛との差異。言葉にしたら消えてしまいそうな微かな違和感を口にしたのだ。

藤原ほど頻繁でも距離が大きくもないが、彼の思考もこうして飛躍することがある。

「えー？どーしたの？どういうボケ？」早坂は笑っていたが表情はどこかぎこちない。

「じゃあ早坂愛なの？」彼は聞きながら馬鹿な質問だなど思った。

「当たり前でしょ」早坂は言った。「大丈夫？頭でも打った？」

「かもね」道留は笑った。

煙草を吸ってまた息を吐く。彼は目の前に居るこの女が誰なのかという命題を一旦置いておくことにした。

「じゃあお前がこんなところに居たのを言わないから、俺がこれ吸ってるのと、告白を断るのが下手すぎるってことは黙ってて」道留は言った。

早坂は笑う。

「下手にしても、あれはないっしょ。タイプじゃ無いにしてももつとオブラートに包みなよ」

「馬鹿だから思いつかなかったや」彼は笑いながら言った。

彼の機嫌はすっかりよくなっている。

「まあとにかく、交渉は成立ね」早坂は言った。



彼女が立ち上がってその場を去ろうとするのを道留は引き留める。

「何？」早坂が聞いた。

「もし告つてきた女がお前が校舎裏から出てくの見てたら、そこそこめんどいと思う。俺が先、お前が後。わかった？」道留が説明する。

彼女は納得して再び焼却炉の影に腰かけた。道留はまだ3分の1ほど残った煙草を焼却炉の奥に投げ入れる。そして校舎裏を去ろうと何メートルか歩き、我慢できずに振り向く。

「最後にどうしてそこに居ただけ教えてくんね？」

「その質問、最初にするヤツじゃない？」早坂は笑つて「ちよつと時間を潰したくてさ」と答える。

道留に向けて白くて指の長い手をひらひらと振る。道留はそれに応えると今度こそ校舎裏を後にした。

○

「何なんですか、あの男」早坂はかぐやに聞いた。

黒塗り高級車の後部座席。運転手を含めこの場には彼女の秘密を知っている人間し

かない。

「あの男って？」かぐやが聞く。

「西園道留です」早坂が答えた。

「ああ、彼ね」かぐやが答えた。表情は変わらない。

「なかなか面白い人間よね、彼は」

早坂は頷かない。かぐやの次の言葉を待つ。

「どこまで知られましたか？」かぐやが聞く。

「まだ何も。演じていることを含めて」

「けど疑われてはいるのね？」

「お前は誰かと聞かれました」

かぐやは笑った。

「哲学的な質問ね、それ」

「そうでしょうか」

「チャラチャラしている一方で頭はすごく切れるのよね」かぐやは微かに笑った。「あなたに似てると思わない？」

「どこですか」早坂は一笑に付した。

どちらかと言えばかぐやに似ていると彼女は思った。

「私は演じていて、彼は素でああなんです。全然違います」

「そう」かぐやは窓の外を見ながら言った。「万が一のために何か打つ手を考えておいた方が得策ですね」

「そうですね」早坂は答える。

忠告はした。具体的な情報を避けるため曖昧な脅しになったから、彼が本気にしているかどうかはわからないが。

とにかく、依然として彼が危険なのは確かである。早坂は頭の中のブラックリストの一番上に、西園道留を置いた。

## 3

呼び鈴が鳴った。白銀御幸が玄関のドアを開ける。そこには道留が立っていて、少年みたいに笑った。

彼は緩いパーマをかけた茶髪にワックスを使って前髪を上げ、清潔感と流行に定義された乱雑さを付与していた。毎回毎回、セットにはかなりの時間がかかっているのではないかと白銀は予想している。耳には銀色のリングが光っていた。

「準備は？」 道留が尋ねる。

「もう出られるよ」 白銀は玄関に座って靴を履き始めた。

遊園地に行くという話が出て二週間強だった。道留がせっせと企画し、今日がその約束の日である。

「圭ちゃんの私服チェックどうだった？」 道留がニヤツとしながら聞く。

「二回引つかかった」 靴紐を結びながら白銀は答えた。「今日は一発でいけると思ったんだがな」

白銀圭の私服チェックが特別厳しいわけではない。白銀御幸のセンスが破綻しているのだ。

その一因として、彼は以前ほとんど私服を持っていなかったことが挙げられる。家計が厳しいから服を買うお金など無かったのだ。そのため彼は休日でも制服で外に出た。着飾りたい欲求がなかったのでそれを不自由に思ったり、服を買いたいと思つたこともなかった。どこへ行くにも制服なのが当たり前の生活だった。

その生活は道留がごみ袋いっぱい、乱暴に詰め込まれた大量の洋服を持って彼の家を訪ねるまで続いた。

「これ、もう着ないやつ。捨てんのもつたないから貰つてよ」

その申し出を一度は断つたが、道留が悲しそうな顔をしたのと自らの貧乏性のために受けとることになった。

道留が帰つた後で袋を開けてみて、白銀はやつぱり受け取らなければよかつたと後悔した。袋の中からは道留の使う柔軟剤の香りではなく、新品特有の、お店の香りがした。こうして彼の手持ちの服が増え、さらに圭からのチエックが入るようになり、彼のファッションはかなり改善された。

今日はふわふわとしたシルエットに見えるオーバーサイズの白いシャツに緑色のスラックス。循環する流行をしつかりと追っていた。なお、圭に直された二ヶ所とは額の上にかけてサングラスと謎のヘアピンだ。その二つだけで流行を追つたファッションは致命的な被害を受ける。

一方道留は、派手で奇抜で個性的な長袖オーバーサイズ開襟シャツを七分袖になるように折り、黒いストラックスにタックインしている。ただでさえ長い彼の足はタックインにより、さらに長く見えた。

靴を履いて立ち上がった白銀は彼の派手なシャツをじつと見る。ジミ・ヘンドリックスの横顔の白黒写真が手のひらくらいの大ききで秩序なくプリントされていた。所々に『Bold as Love』と印字されている。白銀は半ば反射的に『愛のごとく大胆に』と訳した。

「相変わらずハデだな」白銀は笑った。

道留はこういう独特のシャツを何枚も持っていることを白銀は知っている。道留は流行を追わず、自分の表現のための服を選んでいるようだった。

「でしょ」道留は笑った。「圭ちゃんに採点してもらおうかな」彼はそう言つて、圭を呼ぶ。

ほどなくして現れた圭は道留の服装を見て「うわ」と言った。たしかに彼のそれは一般受けしない服装である。

「夜の新宿にいそう」圭は言う。

「バレた？」道留は笑った。「こういうの圭ちゃん的には無し？」

「いいと思いますけど、私は着ないかなー」圭は笑った。

「何点？」道留が尋ねる。

「70点」圭は答えた。「奇抜で普通の人は寄り付きませんよ？」

「確かに、お前の見た目けっこうおつかないな」白銀は言う。知り合いじゃなかったら、こんな装いの人には近づきたくない。

「こーゆー見た目の人間が良いことすると、ギャップで好感度めっちゃ上がるからその分お得なんですー」道留はおどけて言った。

ギャップ、か。白銀は何かに使えるかもしれないと心にメモした。そして時計をちらりと見て道留に声をかける。道留も時計を見て爪先を道路へと向けた。

「じゃあいつてらっしやい」圭は道留を見て言った。

「圭ちゃんも来られたら良かったのに」道留は言った。

「テスト近いから」圭は笑った。「いま遊ぶのはさすがにヤバイ」

「お昼御飯は冷蔵庫、夜までには帰るから」白銀が言う。

「了解、ありがとう」圭が返す。

道留がいると圭の態度が軟化することに白銀は気づいていた。

「んじゃ！またね」そう言って歩き出す道留のあとに白銀は続いた。

今日は石上を除いた生徒会メンバーが遊園地で一日を過ごす日だ。その中には当然かぐやも含まれている。

彼女の侍女である早坂愛は変装に変装を重ね、仲間のボディーガードらと共に客に混ざり、かぐやの安全を確保していた。

かぐやは藤原と共に入場門の近くに立ち、男二人組を待っている。

単にかぐやの安全を守るだけならば、早坂は簡単に満点の対応を見せる。しかし今回は要注意人物が二人も絡んでいるのが不安だ。

対象Fこと藤原千花と、対象Nこと西園道留。

乱数列のごとく次の行動が全く予想できない藤原。

複雑な挙動の不連続関数のような思考形態の西園。

彼らを同時に学校外で相手をするとなると、早坂にもかなりの準備が必要になった。

彼女は黒いかつら、暗い色の口紅、アイライン、黒っぽい服、うさぎのキャラクターのバッグを駆使し、典型的なメンヘラ女のような格好になっていた。蒼い瞳はそのままだが、その青さがかえってコスプレみたいに見えて、メンヘラっぽさをかきたてていた。

男性従業員に彼氏役になってもらいながら遠巻きにかぐやの周囲に気を配る。もともと、目付きの鋭い金髪の白銀と単純に見た目が怖い道留が側にいるのだから誰も



ちよつかいをかけることはきつとない。

彼女には今日解決してしまいたい疑問があった。

(あの男はかぐや様の会長に対する気持ちに気づいていないのか?)

この遊園地に来るきつかけになったのは道留だとかぐやから聞いたとき、ふとそんなことを早坂は思ってしまったのだ。

彼が単にみんなと遊びたくて今回のことを企画したのか、事情を知った上で親切心で企画したのか、事態を面白がったのかとなのかを早坂は考えたが、答えは出ない。

情報が不足しているからだ。早坂には彼の価値判断基準を知る必要があった。彼の思考は複雑だが、藤原ほど自由ではない。分析して効果的な情報を得ることは不可能ではないのだ。

『ご学友、現れました。護衛形態を次段階に移行』無線で誰かが告げた。

○

かぐやの私服は鋭利なナイフみたいに白銀の心に突き刺さった。

清楚という言葉を具現化したかのような純白のワンピースは彼女によく似合っていた。つついっついてしまう。

その服装の可愛さを指摘したい白銀。しかし働く自制心。『そのワンピースよく似合ってるぞ』などと言ったなら赤面必至の事態を招く。そして例のごとくかぐやの『お可愛いこと』が待ち受けているのだ。白銀は悶々としていた。

「千花ちゃんの服かわいいね」突然、道留が言った。

その言葉に白銀は思わず彼を見る。『かわいい』という直接的な言葉をさらつと口に出したことに驚いたのだ。

「えへへ、でしよでしよ〜？」藤原は嬉しそうに言った。特別照れる様子もない。

道留は藤原を女として扱うが恋愛対象として扱うことはない。そのことを藤原はよくわかつていたので彼の言葉に一喜一憂することはない。仲のいい友達がいてそれがたまたま異性だった、というのが彼らの関係である。

膝丈の桃色フレアスカートにふわっとした素材の白いブラウスを着ている。よく似合っているなど白銀も思う。なお、胸の主張は激しい。

白銀の目線に道留が気づいてニヤツと笑った。俺に続けと言っているように見えた。本当は全部バレてるんじゃないかと白銀はたまに思う。

任意的かどうかは別として、道留の言葉は白銀にかぐやの服装を誉めるチャンスを与えた。

しかし白銀は知っている。道留が異性の服を誉めるのを許されたのは、道留の持つ

飄々とした雰囲気と藤原との特異な関係のためであることを。

しかし白銀は思い至る。道留が藤原の服装に言及した以上、男二人のどちらかが、かぐやの服装にも言及しないとかがやが劣等感を覚えるかもしれないと言うことに。

(やつてくれたな道留)

道留はかぐやの服装に言及するつもりはないらしい。それを白銀は感じとつた。それなら自分で言うしかない。

彼は言葉を選び始めた。天才ゆえ、一瞬でその作業は完了する。

短く息を吸う。

「四宮もそれ、似合ってるぞ」白銀は淡々と言つた。

指事語を用い、対象をぼやかした上で無関心を装うというテクニク!

それでも照れを見せたら即座に敗北が決定する台詞だったが白銀はポーカーフェイスを貫き通した。

「ありがとうございませす、会長」かぐやは俯きながら鼻の頭を手の甲で擦つた。表情は見えない。

「じゃ、いこうか」道留がゲートへと歩きだし、三人はそれに続いた。

休日だったので人が多かった。家族連れ、男連中で来ているグループ、女友達で来ている女子高生、そしてカップル。

白銀たちと同じように男女二人ずつのグループで来ている人もいたが、恐らくはダブルデートだろうと白銀は思った。周りからは自分達もそう見えているのだろうか。そう思つて少し複雑な気持ちになる。

園内は広い。フリーフォール、ジェットコースターが三つ、元々ほんとうに病院だったお化け屋敷、観覧車。それらがこの遊園地の売りだ。

「やべー、思つてたよりでかいな」道留がゲートから最も離れたところにあるジェットコースターを見て言った。

「怖いんですかー？」藤原がニマニマして聞く。

「怖くないや乗る意味なくね？」道留が言った。

白銀は確かにその通りだなとは思つたが、彼に賛同することはなかった。白銀は絶叫系アトラクションが苦手である。かぐやとともに遊びに来たのは嬉しいが、醜態さらしたくはない。できることなら絶叫系は避けたかったが、遊園地のメインディッシュである絶叫系に乗ることはもはや定め。暗黙の了解である。

しかし！

かぐやが乗りたくないと言えば状況は一転する。かぐや一人をベンチに座らせてお

くわけにはいかないのです、かぐやの付き添いとして絶叫系を回避することが可能なのだ。白銀はそこに一縷の希望を見いだした。

「わたしジェットコースター初めてなのですごく楽しみです」かぐやが言った。呆気なく絶たれる白銀の希望。

「じゃあ早く乗りましょー！」はしやぐ藤原はかぐやの後ろにまわると背中をポンポンと押しながらジェットコースターへと移動を始めた。男二人もそれに続く。

「お昼前に三つとも乗っちゃいたいね」道留が言う。

「どうしてですか？」かぐやが聞いた。

「そりゃあ……」道留はニヤツとした。「通行人は傘なんて持つてないからな」

かぐやと白銀は青ざめた。藤原は意味がわかっていない。

「そんなにヤバイのか？」白銀はできるだけ平静を装って言った。

「あつちがヤバイってより、俺がこういうの苦手なんだよね」道留が答える。「胃のなかに食べ物入れてると大惨事よ。まあたぶん、みんなは俺より平気だと思うよ」

「たぶんって……」かぐやが呟いた。不安げな表情だ。

(俺がしつかりしないと)

白銀は自分を奮い立たせた。

コースターに並ぶ列の最後尾に着くと、かぐやは『最後尾はこちらです』と書かれた看板を持つ係員になにやら耳打ちした。

するとすぐに何処からともなく別の係員が走ってきて四人を先導する。彼らはすすると列の横を抜けていった。

白銀がかぐやに何をしたか聞くと、彼女はこの遊園地が四宮グループの傘下にあると教えてくれた。つまりこの遊園地は生徒会一行が機嫌を損ねないよう、全力で彼らに接させねばならないのだ。かわいそうに、と白銀は思った。

そして四人は列に着いてから二分もせずにジェットコースターにたどり着く。二人がけのシートが一番前から二列確保してあった。

藤原が二列目の奥に座ると、即座に道留が藤原の横に座った。そして白銀を見て目を細めて笑う。

そう、白銀と四宮は隣り合って一番前に座る他ない。

白銀は四宮を奥に座らせ自分は手前に腰かけた。シートベルトを着けるとバーが降りてきて体をシートに固定する。

女性従業員がおもてなし用の明るい声でカウントダウンを開始した。

「10、9、8、5、2、1、0！はい、いってらっしゃーい！」

ジェットコースターは突然加速してレールの上を滑り出した。はじめからかなりの速度が出ている。ロケットスタートというやつだ。

「ふざけんな、マジでふざけんな」白銀の後ろで道留が数を数えられない従業員にキレている。絶叫系が苦手というのは本当らしい。それなのに喜んで乗るあたりが彼らしいなど白銀は思った。

ちらりと横を見るとかぐやは無表情でそこに座っていた。意図して無感動になっているのが白銀にはわかった。

しばらく走るとガコンという音と共に、コースターは坂を登り始めた。長い長い坂だ。ずっと高く登っていく。

「わくわくしますねー」藤原が心底楽しそうに言った。

しかし他の三人には彼女の声に答えるほどの余裕はない。視点は上に上がっていった、園内を上から見下ろす形になる。もうすぐ坂の頂上に着く。

「なあ白銀」道留が言った。「吐いたらゴメン」

その瞬間、ジェットコースターは坂を下り始めた。いや、坂という表現はもはや不適切かもしれない。ジェットコースターはほとんど地面に向かって垂直に加速していた。風が突き刺さるように顔に当たり、言い知れない浮遊感が白銀を襲う。

「いえーい!!」感嘆の声をあげる藤原。

「アホー……!!」誰かを罵倒する道留。

かぐやの叫び声は到底文字に起こせないもので、空気を切り裂くような鋭さで、長く、高く、響いた。

一方白銀は静かだった。案外大したことがなかったわけでも、まわりの叫び声が彼を冷静にしたわけでもない。

目をぎゅつと閉じて死への恐怖に耐える。声なんて出ない。出せない。横にはかぐやがいるのだ。情けない声など出せるわけがない。かといって楽しげな歓声を上げられるわけもない。じつと耐えることしかできなかった。風を切る音が周りの声を遠ざけていく。そしてその風に自分の恐怖心を運ばせた。

ゆっくり薄目を開けると右側にバーを掴む小さくて綺麗な手が見えた。細い指に力が強くかかり、白くなっている。彼はバーを掴んでいた右手を伸ばし、硝子細工のような手を優しく覆った。かぐやの手は微かに跳ねたが、すぐに彼の手を受け入れる。彼女の手は案外あたたかかった。

ふと気がつくと、コースターは平坦なレールを走っていた。速度も落ちている。ゴールが見えた。



「あの、そろそろ……」小さな声でかぐやが言った。

白銀は自分の手を見るや否や飛び退くように彼女の手から自分の手をのけた。

「す、すまん……」赤面する白銀。もちろんその横のかぐやも同じような顔の色をしている。

手のひらにはかぐやの手の感触がまだ残っていた。

「でも、その……」かぐやが話し出した。「ありがとうございました」

その言葉は注射みたいで心臓をドキッと刺して、白銀の体の中に暖かさを流し込んだ。

「あー、終わりですねー」藤原が残念そうな声を上げた。前の二人のいちやこらが終わったのが、という意味ではない。そもそも二人のひそひそ話は聞こえてすらいない。単にジェットコースターの終わりを残念がっているのだ。

やがてコースターはスタート位地に戻り、降りていたバーが上がった。席を立つて建物から出ると、道留がトイレを目指して疾走する。

「楽しかったですねー」藤原はいつもどおりふわふわと笑っていた。

「あ、ああそうだな」白銀は精一杯平静を装った。予想外の収穫があり得るものは多かったのだが、別の恐怖が彼の頭にまとわりついている。

「もう私、乗りません……」かぐやはどことなく複雑な表情をしていた。

「えー！あと二つあるんですよ!？」藤原は残念がる。

「まあ、四宮がそう言うなら今日はもういいんじゃないか？」白銀は四宮を氣遣う。それに彼は、無意識にかぐやの手を握るなんて失態を繰り返したくないのである。

やがて（顔が土気色の）道留が戻ってきて体調の限界を告げたので残り二つはまたの機会となった。なお、クレープ三つを道留が奢るという条件で藤原は手を打った。彼は甘やかすのが、藤原は甘やかされるのが得意である。

彼らは昼食を園内のレストランで手早く済ませた。値段の割にポリューミーだなどという印象を全員が持った。かぐやにいたっては食べきれないほどだった。彼らは彼らの注文した料理が、四宮家令嬢へのサービスとして、通常の二倍のサイズで出されたことを知らない。

メリーゴーランドやコーヒーカップに藤原を乗せて遊ばせつつ、彼らはゆっくりと病院へと向かった。

○

今のところ、早坂愛の任務は順調であると言えた。かぐやの側にいる近寄りがない雰囲気、困気の男ふたりのおかげで、普段より楽な仕事になっている。

早坂は西園道留が白銀の気持ちには気づいていることを確信することになった。

彼はマジック・ジョンソンのようなパスを白銀に二度も出し、彼の得点をアシストしたのだ。

親切心なのか面白がつてるだけなのかは不明だが、結果としてかぐやの利益に繋がっているのは間違いない。彼女に被害がでない限りは、彼の行動は甘く見るべきだろうと結論付けた。

『かぐや様とF、Sがチュロス販売車に向けて移動を開始。Nはベンチに。コードCとDは販売車へ近づけ』無線が入った。

「了解」コードCの早坂は答えた。彼氏役のDと共に移動を開始する。

Nはベンチに？気になった早坂がベンチを見ると道留はぐったりとしている。そんなに苦手なら乗らなきやいいのに、と早坂は思った。

荷台の側面が店になっている車。その側面の上にはメニューが飾つてある。早坂とコードDはそれを見上げて、メニューを決めるふりをして、視界の端でかぐやたちを観察する。

楽しそうにわいわいと話ながら並んでいた。とてもほほえましい。駆け引きこそた

まにあれど、そこに偽りの感情などないことが早坂にはわかった。そして少し寂しくなる。

『嫌いなのか？あの二人のこと』

ふと道留の言葉を思い出す。

嫌いなわけじゃない。疲れてしまうだけ。

素で話せたらきつと楽だけど、そんなこと不可能だと彼女は知っていた。

偽らないと愛されない、という彼女の大前提がある。

彼女はこれの真偽を幾度となく疑ったが、真であろうと偽であろうと、自分はこの前提の上に生きることと安心できているのだということを知っていた。

だから、かぐやが妬ましい。

彼女が自分をよく偽るといふことは知っている。

けれど、藤原千花や白銀御幸の前で見せる笑顔に偽りはない。

全くの憶測だ。もちろん全部が全部本当の笑顔であるわけがない。本当の笑顔と偽りの笑顔は半々かもしれないし、もっと偏りがあるかもしれない。

けれど、少なくとも、彼女が自分に見せる白銀御幸への気持ちは本物だ。あの弱さは本物だ。自分に彼のことを語るときのあの表情は本物なのだ。打算などない、本物の感情。

自分もかぐやに、弱味を晒せたなら。

そんなことを思つて、もがいたのはもう何年も前のこと。そのときほど、この主従関係が嫌になつたことはない。

この主従関係がある以上、自分がかぐやの前で本物の感情を溢れさせることはできない。許されない。

他のだれかに感情を現にすることは、仕事上できない。もう自分は、偽りながら生きていくしかないのか。

そこで腑に落ちた。

偽らないと愛されない、という信条は、自分を守るために作り上げた、鎧みたいなものなのだ。自分の生き方を肯定するための鎧なのだ。

そしてやはり、この鎧がなくては生きていけない。

そのとき、無線が入つた。

『CとDは三人の後ろにつけ』

彼女は任務中に物思いに耽つていたことを恥じ、かぐやたちに意識を向ける。

彼女らはすでにチュロスを手にとつていた。三人が道留のいるベンチへ向かう。早

坂とコードDは三人の何メートルか後ろを歩いた。

道留は顔をあげていた。かぐやたちが戻ってきていることには気づいていない。

彼は早坂が見たことのない表情をしていた。彼は、憤りと悲みを混ぜたような静かな表情で、ぼんやり何かを眺めている。

彼の視線の先を探した。すぐに彼が何を見ているのかがわかり、そして思わず目を見開く。

四人が横一列になって歩いている。真ん中には子ども二人。幼稚園児くらいの女の子の手を小学校低学年くらいの男の子が握っている。その兄妹の両隣を親が固めていた。母親は男の子の手を、父親は女の子の手をとり、そうして一列になっている。

道留は楽しそうに話している家族連れを見ていた。ぼんやりと彼らを目で追っていつて、やがてかぐやたちを見つけると、何事もなかったかのように笑って手をふった。

生徒会一行はお化け屋敷にも並ばずに入れた。もともとが病院であるその施設には、やはり異様な雰囲気が漂っている。

「キャストの方々、怖くないのかしら」かぐやが言った。

「うーわ。冷めてますね、かぐや様」道留は反応する。

「だってこんなところにずっと一人ですよ？」

「まあ確かに、否めないな」白銀が言った。

順路に従って、とある病室を覗いたときだった。

「いやあああああ!!!」

ベッドの下から這い出てきた血濡れの女にかぐやが悲鳴をあげる。せつかくなので道留も一緒に叫んだ。

「白銀え！どうにかしろお!!!」

しかし例によってヘタレの白銀。叫び声をあげないのはショックが大きすぎたためだ。

「うわあ。良くできてますね〜」藤原は冷めたことを言う。

そんな藤原を先頭にして歩くことになった。様々なトラップが発動する中、道留は後ろから来る二人組について考えていた。

ここに来てからチラホラ見かけるカップルだ。広い園内で何度も遭遇するなんて偶然は、きつとない。だから恐らくかぐやの護衛。自分達のグループと後ろの二人組の入場時間があまりズラされなかったことも根拠のひとつだ。しかし、その程度のこととが彼の興味を引いたわけではない。

彼が気になったのは、二人組の年齢だ。二人とも自分達と同じくらいの年齢に見える。

ところで道留は、学校生活において、かぐやをサポートとする四宮グループの人間が存在してはならないだろうと考えていた。彼女のような国の要人を、いくら学園内だからといって放っておくというのは考えにくい。躍起になって、それが誰かを考えたわけではないが、早坂愛がサポート役なのではないかとうっすら予想していた。

早坂愛のバックにあるのが四宮家だとしたら、校舎裏での彼女の言動に説明が付けられるからだ。そもそもあんなところで時間を潰していたのも、かぐやが生徒会の仕事を終えるのを待ったためだというのなら納得できる。

そしていま道留は、あの二人組の片割れ、女の方が早坂愛である気がしてならなかった。年齢が近いからというたったそれだけの理由で、彼はそんな気がしていた。身長が



靴で調整できる範囲で伸びていたし、装いも髪の色も目の色も普段とは全く違っていたが、四宮家の人間ならそのくらいするだろう。

ふと名案を思い付く。思い付いたらやってみたいし好奇心は止められない。リスクはあるが仕方ない。曲がり角で道留は意を決して、生徒会一行からこっそり離脱すると物陰に潜んで二人組を待った。曲がり角を利用したため、道留のこの行動は後続の二人には全く見えていない。彼は近くに落ちていた赤く染まったシートで身を隠し、オブジェになりきった。

二人組が来た。足音が近づいてくる。角を曲がった。道留が居なくなっていることに気づく。

女は通信機に口を近づけた。

「Nをロスト。繰り返す、Nをロスト」

彼は確信した。

「Nって誰のこと？」道留は後ろから早坂のカツラをはぎ取った。

「な……」早坂が目を丸くして振り向く。

男性ガードマンは、やられた、という顔をして頭を掻き、髪をくしゃくしゃにした。

道留はニヤッと笑っていた。



放課となつて間もない教室は喧騒に包まれていた。

早坂愛は自分の席で顔につき、ぼんやりとクラスの真ん中で談笑している男子の一群を眺めている。

クラス内カースト上位層のグループ。その中に西園道留がいる。会話の主導権は彼が握っていた。彼が何か冗談を言つて、その周りが大きく笑う。彼の空間演出能力は力リスマ的だ。

彼が生徒会で遊園地に行つたのが三日前。早坂が校舎裏で彼に遭遇したのはもう二週間も前のことだ。

彼は良心的な金額を要求し、早坂が四宮の人間であることを口外しないと誓つた。しかしどうしてわかつたのかは教えてくれない。

四宮家の一部では彼をこちら側に引き込んでどうか、という意見もあつた。彼の素行の悪さからそれは却下されたが、彼は四宮家から注目される人間になつた。彼が四宮家から制裁を受けていないのは、彼が利用価値のある人物だからである。

かぐやでさえ、彼への評価を改めていた。とてつもなく頭の切れる男としてインプットされていた。

彼を危険人物と見なして二週間。彼女は毎日彼を観察していた。にも関わらず、遊園地でのあの失態。早坂はかなり悔しかった。

しかし校舎裏で見せたあの頭の回転の速さを、普段の彼の生活の中に見ることは未だにできていない。だから、いまだに情報が足りない。意図して隠しているのだろうか。早坂は想像できる。

(じゃあ何で隠してるんだろう)

彼女は思考の渦へ落ちていく。何度も考えた命題。思考は堂々巡りで結局いつも結論はでない。しかし、ふとした拍子に考え始めてしまう。何故考えてしまうのか、その理由もわからない。

境界条件が足りないのだから考えても無駄だと思っているのに、彼女は今日も思考をスタートさせてしまった。

三日前に彼が見せた普段とは違う表情。家族連れを眺めていたあのときの表情。早坂はその表情から、彼に親がない可能性を考えた。しかし調べてみると西園道留の両親は存命。彼は携帯会社の長男だった。といつても上に姉が二人いる。

彼女は自分の直感を信じ、深くまで調査したが西園道留は西園幸太郎の息子であることは揺らがなかった。

あのとときの彼の表情は光のイタズラだったのだろうかと彼女は思い始めていた。

「なーに見つめちやつてんの〜？」早坂は突然話しかけられた。早坂の肩に女子生徒が手を置く。彼女の名はアヤネ。校内擬態早坂の友人の一人だ。

早坂は振りかえつて「何が〜？」ととぼけた。

「（こ）んと（こ）ずつとだよねー」アヤネの隣に立つ女子生徒が言う。彼女の名はユキ。校内擬態早坂のもう一人の友達。

早坂の二人の友人はニヤニヤと笑っている。

「え、どーゆーこと？」早坂が笑顔で聞く。取つて付けた笑顔だが、一般人には見抜けない。

「好きなんですよ？」ユキが頬にできた窪みをより深くさせながら言った。

早坂の頭はクエスチョンマークで一杯になった。

「あたしが？」

「うん」アヤネが言う。とても楽しそうな顔をしていた。

「誰を？」

「西園道留」ユキが言った。

早坂は対応に困った。二週間ずっと観察してたのは事実。確かに端からみれば自分が好意を持っているように思えるかもしれない。

「ぜんぜんそんなことないよお」早坂は取り繕った。しかし遅い。

「いまギクツて顔したじゃん！もう誤魔化せないよ」アヤネが言った。こういうときだけ、彼女は鋭い。

「違う違う、ぼーつとしてただけだよお」早坂は手を顔の前で振りながら言った。

「ここんところずーつと、みっちゃんのこと見てたじゃん」ユキが言う。

「いやいや、ホントに、ホントに違うから！」早坂は心から言った。

彼女はどうしてわかってくれないのかと憤慨した。そして彼女の冷静な部分は、いくら否定しても恥ずかしかつてただけにしか見えないということに気づいた。こういうときは、話を具体的ににした方がいい。

「あたしあの人、むしろちよつと苦手なんだよね」早坂は苦笑いしながら言った。もちろん、作務的な表情である。

「え、なんでなんで？やっぱ女関係のこと？」ユキが言う。

「うん……… すごく遊んでるらしいじゃん？その、一晩だけ付き合つて、つて人が何人もいるって」

「それホントらしいよ。んで他校の子としか付き合わないみたい」アヤネが低いトーン

で言う。彼女たちをペースダウンさせるといふ早坂のもくろみは上手くいった。

「だからさそんな人、なんか嫌だよ」早坂は危機を乗り切ったことを確信しながら言った。

「普段は面白いしカッコいいし紳士的なんだけどねー」アヤネが言った。「ちよつと残念」

「でも面白いしカッコいいし紳士的だから嫌いになれないんだよなー」ユキが笑った。「気をつけなきやつて思つてても心許しちゃうタイプだよね」

「同感」アヤネが笑った。

「二人とも、もしあたしがあの人のこと好きだつて言つたらどうするつもりだったの？」早坂はふと気になって尋ねた。

「止めてた」ユキが急に真顔になつて言う。「あの人、付き合うとなると危ないよ。もし愛があいつのことホントに好きだつて言つたらやつぱ心配だし」

「にしては二人とも楽しそうだったけど」早坂は不思議に思つた。

「演技。あんな感じではないかと話してくれないかなつて。二人でこそこそ計画してたの。上手かつた？」

一杯食わされた、と早坂は思つた。そして自分が上手く誘導されたことがとても嬉しかった。彼女らのまだ見ない一面を見ることができたからだ。チャラチャラしている

とはいえ秀知院学園の生徒。そこらにいる高校生と一緒にしてはいけない。

「ねえ騙されたんだけど！」早坂は笑った。つられて二人も笑う。

笑いが引いた頃にアヤネが口を開いた。

「あのね、愛」早坂はアヤネを見た。「あの人ホントに気を付けた方がいい」

「わかつてるよ。顔もタイプじゃないし」

「そういうことじゃなくて」アヤネはいつになく真面目な顔だ。「最近、あの人もね、愛のことよく見てる」

「え？」

「愛はかわいいから、目えつけてるかも。気を付けて」

○

「西園道留って、知ってますよね？」早坂はとある公立高校の校門から出てきた女子生徒に話しかけた。

この女子生徒が道留の元カノであることは、すでに調べがついていた。

「え、もっかい言ってもらっていいですか？」きよとんとした顔で女子生徒が言う。

「西園、道留です」早坂はゆっくり目に言った。

しかし女子生徒はまるでピンと来ていない。

「え、誰ですかそれ」演技しているようには見えない。

早坂はスマホを操作して道留の写真を表示させた。それを女子生徒に見せる。その瞬間、女子生徒の顔は明確に歪んだ。

「にしぞのみちるっていうのが、本名なんですか？」女子生徒が聞いた。その言葉は震えている。

「ええ。あなたにはなんて名乗っていたのですか？」早坂は聞いた。

「真方葵」まがたあおい彼女は忌々しそうにその言葉を口にした。「私の心をもてあそんだ、クズです」西園道留が偽名を使っていた。この事実は早坂にとつて大きな収穫だ。道留がクズであるということは周知の事実であったので、その方面の会話をするのは非効率的だったが、ここまで来てそれを聞かずに帰るというのも何かおかしい。それにこの女子生徒は話したがっている。早坂はそう思っていくつか質問をした。

彼はどのような手法で、あなたに迫ったのかという質問をしたときだった。

「あの人、孤児なんです。自分には家族がない。飛行機事故でみんな死んでしまった。俺は親父が庇ってくれて助かったけど、母さんが庇った妹の方は駄目だった。そんな弱



味を吐くんです。あの派手な見た目してる人が。それで、私だけだって、俺には君しか残されてないって……」

それはすべて嘘だ。早坂はそう思ったが、すぐに遊園地での彼のあの表情を思い出した。彼が元カノに語った家族構成と、遊園地で彼が見ていた家族のそれは、一致している。背筋に寒気が走った。

もし、彼の言ったことが本当ならば？

「それ、全部、嘘ですよ」早坂は言った。「あの人には父親も母親も姉も、全員いて、全員生きてます。あの男は、クズです」

「ですよね。浮気されてから、もしかしてって思いました」女子生徒は泣きそうな顔で笑った。「でも、あのときは全部本当に聞こえたんです」

手にいれた情報は少ないし粗い。もっと調査する必要がある。だが一度、彼にぶつけてみようと思つた。

## 5

「西園道留、いえ、真方葵と呼んだほうがお気に召しますか？」早坂は道留に言った。

放課後の校舎裏、早坂は彼を呼び出していた。正体を見破られた今、ギャルらしい話し方は無意味なので、四宮家に対するのと同じ口調で話す。

「あー、調べたの？」道留の表情は変わらない。「恥ずかしいな」

「中性的なカッコいい名前ですね、真方葵って。自分でつけたんですか？」早坂は煽った。

冷静さを奪えば、相手がボロを出す可能性は高くなるからだ。彼の表情が変わった。しかしそれは早坂が期待していたものではなく、人を哀れむようなものだった。

「偽名を人につけて貰うヤツなんていないだろ」いつも通りの口調で言った。

早坂は攻撃の手を緩めない。何が有効な言葉になるかわからないので、思い付くままに彼を煽る言葉をぶつける。

「その名前、気に入ってるんですね。何人に対してもそう名乗ってる」

彼が女関係においてだらしない人間だったことが幸いし、多くのデータを取れていた。

「それが非合理的だと？」

「普通はコロコロ名前を変えますよね。そうしない理由は何です？」

「女ごとに名前変えんの？めんどくない？」

「それで誤魔化せるとでも？」

「それ、君の願望でしょ？」

「どういうことですか？」

「早坂さんは俺の偽名について何らかの仮説を立てた。その仮説に俺の発言が反しているから、これが誤魔化しのための嘘であってほしい。そういう願望。ところで、どんな仮説を立てたわけ？」

一瞬言葉につまった。自分の言葉の発生に、この男は説明をつけてくる。理由を明らかにし、言葉の正当性を疑わせてくる。つまり道留は攻勢に出ていた。

しかし早坂は彼の心を揺さぶれていることを確信した。

「あなたの本名は真方葵。何らかの事情により、西園道留と名乗らざるを得なくなった。知り合った女性に本名を言うのは、真方葵としての自分の存在を確認するため」

世界中の飛行機事故の資料を漁っても、真方という性の日本人が死んだという情報は入ってこなかった。つまり、飛行機事故自体に意味はない。親がいなくなったという事実のみが意味を持つと早坂は考えた。しかし彼女の理屈は破綻している。

「早坂さんって、バカなの？」道留は笑った。「俺の親、知ってるでしょ？期待して損した」

早坂は言葉に刺を感じた。彼もまた、自分から冷静さを奪おうとしている。そう思った彼女はその作戦に乗らないように、自分に釘を刺した。

確かにそう、早坂の理論は破綻している。しかし、早坂にはその自覚があった。彼には親がいる。養子になったわけではない。血の繋がった親の存在が早坂の仮説を否定していた。彼の見せたあの表情は、根拠としては弱い。だから、本人から直接情報を得るために、早坂はここに来ている。

「あなた、誰ですか？」早坂は聞いた。前にここで彼に言われた言葉を返した。

「西園道留。当たり前のこと聞くなよ。ああ、ちよつと待って……」彼は顔を上に向けて何もないとところを睨んだ。

これは彼の考えるときの癖だが、早坂はどうぜんそんなこと知らない。怪訝な顔をして、しかし彼の言葉通り少し待った。

「仲間探し？」彼が言った。

「は？」

「自分と同じように、自らを偽りながら生きてる人間を探してる？」

「違います」

即答する。冷静な言葉とは裏腹に、早坂の感情は大きく動いていた。自分の発言に自信が持てなくなる。彼の言葉を否定できたのは表面上でだけで、彼女の心の大部分は、道留が付けた理由を正しい見込みが高いものとして検証し始めている。

自分に不利な言葉の正当性を客観的に分析できるくらいには、彼女は頭がいい。

彼女は焦りはじめた。

自分は、自分のことを西園道留に理解してほしいのか？彼に期待しているのか？今まで彼について行ってきた調査は、四宮家のためではなく、自分のためのものだったのか？

答えなど出ない。こういう場合、思考を一度停止させてのちほど再度検討すべきだと彼女はわかっている。彼女はそれを行ったが、焦りはその場に残留した。

「ふーん？本当かなあ」道留が言う。

「だいたい、自分を偽っていない人間など存在しません。ですから、もし私があなたの言うように誰かを探していたとしても、あなたのような人を選ぶ理由はありません」苦しい言い訳だなと思いがら言った。

「いや、分かかって言ってるでしょ？問題はその度合い。普通は偽り方が流動的、水つばいんだけど君はもつと機械的で固体みたいだ。そのアーキタイプは珍しい。だから仲間を探さないと寂しい」道留はどうせん彼女の理論の薄いとこを見逃さない。

問い詰めるはずが、早坂の立場のほうに危うくなつていく。本来、このような場面は退くべきであるが、道留を呼び出したのは他でもない、早坂愛だ。

自分で呼び出しておいて、自分が先に逃げるように退散する。こんな行動は、別段プライドが高くない人間でも避けたい。そして早坂は、人並み、またはそれ以上にはプライドが高い。さらに、遊園地にて道留に正体を見破られたという悔しさも加わる。つまり、彼女は退けない。

「固体的なのは、あなたもでしょう?」

早坂は教室にいるときの彼と、こうして鋭い考察を遠慮なくぶつけてくる彼との差異から攻めることにした。

「まあね。早坂さんと違って、アウトプットの仕方は1つだけだけど」

「私がかぐや様にお仕えするために、自分の性格を固体的にし、きっぱりとした切り替えを可能にしています。あなたはこうしてそうしているのですか?」

「だって友達に欲しいじゃん」彼はさらっと言った。

それだけ?と早坂は思った。彼のことだから複雑な動機によつてのことだと思つていたのだ。

この感想は、彼が複雑な動機を抱えていてほしいという願望の現れなのだろうか。道留のせいで要らぬことを考えてしまう。早坂はこの命題についても考えるのを保留し

た。二つとも入浴中に処理することに決める。

「意外ですね」

「ありがたい。過大評価してくれて。ところでなんで四宮家は俺に制裁を加えないの？」

道留は急に話題を変えた。逃げたのか？彼女はその可能性を検討したが、深追いは危険だと結論付けた。話題の変更が早坂にとって有り難いことなのは、言うまでもない。

「私の変装を剥いだ件ですか？」

「そう。早坂のコスプレを剥いだ件」彼は突然呼び捨てにした。

ああなるほど、こうやってこの男は人との距離を詰めるんだなと早坂は思った。

「家の者のなかには、私の変装を見破ったあなたに利用価値があると考える者が何人かいます。その何人かが、あなたを四宮グループに引き込もうとしましたがあなたの素行が悪かったので廃案になりました。今は保険として生かされています。よかったですね」「じゃあ俺は、ホテル行き過ぎて高額バイトを逃したわけか」彼は全く残念そうでない顔で言った。

「去勢すればいつでも歓迎しますよ。去勢すれば」

「やだよ。これを待っている女が何人いると思ってるんだ」彼は自らの下腹部を指して言った。

「セクハラですか？訴えますよ？」

「ごめん」

「ちなみに何人いるんですか？」

「六人」

「うーわ」早坂は言いながら一歩下がった。「道留さんって病気持ちってたりしないですよ？」彼女も彼の呼び方を変えた。先程のカウンターである。

言及しておくが、彼女は彼に好意を抱いていない。単に、手のひらで転がせたら愉快だろうなという気持ちである。

「生でするわけではないでしょ？」

「ごもっともである。」

「恋人は？」

「二人」

「罪悪感はないんですか？」

「俺に泣かされるヤツが悪い」

「清々しいまでにクズですね」

「恋したことがないからね。恋の辛さが全くわからないから、相手の気持ちも考えられない。一途って言葉の意味もわからない」道留は面白くなさそうに言った。「早坂は？」



何人キープしてんの？」

「二人もしてません。一緒にしないでください」冷たく言った。

「そんなにキレイな顔のパーツとバランスで？」

自分の容姿を褒める言葉に彼女は警戒した。友人たちの言葉を思い出す。この男は自分を落とそうとしているのかもしれない。

「顔は関係ないですよ。中身がクズか、そうでないかの違い」

「ねえ恋愛と言えばさ、うちの会長とかぐや様はいつくつくかな」彼はまた話題を変えた。

「やっぱり気づいてましたか」これは早坂も興味のある話題だったので乗った。

「遊園地で監視してたなら、俺のアシスト見てたでしょ？」

「道留さんを誉めるのは気が進みませんが、確かにそうでしたね。まあ、二人ともヘタレですからくつつくのはまだ先の話になりそうですが」

「恋愛相談乗ってるの？」道留が柔らかに笑う。

彼は立っているのがかかったるくなつたのか、校舎にもたれてすわつた。早坂も座りたかつたが、道留の横に座るのが嫌だったのでその場に留まる。

「のろけ半分ですけどね」

「ああそれは大変だ。ほほえましい気持ちも混ざってるだろうけど」

「道留さんも白銀会長から？」

「いや。俺みたいなヤツに真面目な恋愛相談を持ちかけてくるヤツなんていないよ」  
「確かに」

「まあ、俺が白銀の本命に気づいてるってこと、そろそろ感付くんじやないかな。そしてら遠回しに意見求めてくるかもね」

早坂は道留の横に歩いていき、校舎にもたれかかった。道留の側に行きたかったわけではなく、ヤリチン男の目の前に何度か折って短くしたスカート、ひいては太ももを晒すのは危ないのではないかと思つたからである。だから早坂は座っていないし、彼らの間にある物理的な距離は他人行儀だ。

「ま、流石にもうすぐ夏だしさ、何かしら進展するだろ」

「本当にそう思います？」

「じゃあ、進展したらいいなあって言い直すよ」

早坂のスマホから通知音が出た。画面をチラリと見ると同い年の主人から呼び出しが入っている。

「じゃ、用事できたので」彼女はそう言ってその場を立ち去った。

後ろから「頑張れー」と聞こえたが返事をする必要もないだろうと考えて、なにも言わなかった。



「今日西園先輩はどうしたんですか？」石上優はなんでもないふうに言った。

早坂と道留が校舎裏にいる頃、生徒会室には石上、白銀の二人がいた。

「遊んでるんだろ。どうした？何か用事か？」白銀が答えた。

「えーと、そういう訳じゃないんですけど」石上は言葉を切った。

彼には敬愛する白銀に聞いておきたいことがあった。

石上優は西園道留のことが好きではない。むしろ嫌いだ。理由は石上の心にできた消えない傷と道留の女遊びにある。

萩野という男がいた。嘘をつきなれたクズ、というのが石上の彼に対する評価だった。彼の悪事を止めるため石川は一人奮闘し、そして今不当な扱いを受けている。

ほとんど毎日女と遊んでいるという道留の行動は、石上の厭悪する萩野のそれと重なるところがある。ゆえに石上は道留を警戒し、それは嫌いという感情として定着した。

そんな道留が、憧れの白銀が率いる生徒会のメンバーの一員。それが石上には、どうも納得できない。人を傷つけることを悪とする白銀が、どうして彼を側に置いておきたがるのか。石上は、それが知りたい。

しかし、聞けない。道留と白銀はお互いの家を行き来するくらいに仲がいいことは、いつだったかの会話からわかっていた。仲のいい友人を批判されたら、批判した者に好印象を抱かないのは明らか。そして石上は白銀に嫌われたくない。

「石上さま、道留のこと好きじゃないだろ？」白銀が唐突に言った。

石上は驚いた。考えていることを当てられた驚きだ。そしてそんなに態度に出ていたかと省みる。

「あ、ええ、まあ。すみません」石上は言った。

「謝る必要はないさ。仕方がない。そういうのは誰にだつてあるし、特にあいつは評価が別れる性格してるからな」白銀はいつも通りの口調で言う。

「あの、すみませんついでのですが、何故会長は西園先輩を……」石上の言葉が途切れた。言葉が見つからなかったからだ。

「生徒会に呼んだのか？」白銀が言葉を引き継いだ。石上は頷く。

「俺はこの学校のチャラチャラしたグループからはそこまで慕われていない。生真面目だとそういう生徒から受けが悪い。だが道留は違う。そこに利用価値があると判断した。というので納得できるか？」

「できません」石上は即答した。

「あいつが俺をブレーキと見なした、というのでは？」

よく意味がわからなかった。

「どういうことですか？」

「俺にも正確なことはわからん」白銀は席を立てて窓の外を見た。「一年の頃、あいつはもつとヤバイことに手を出してた。校外だけど、彼氏持ちの女に手を出してみたり暴力沙汰起こしたり。俺は、それを面と向かって注意したことがある。その時にあいつに『ブレーキ役になってよ』と言われた。以来、どういいうわけかあいつは俺を慕ってる。そして素行も、未だに悪いが、ずいぶんマシになった」

「よく、わかりませんね」石上は道留の思考を全くというほど追跡できなかった。

「そう、よくわからないから側においておきたいんだ」

「手綱を付けるってことですか？」

「いや、目の届くところにおいてほしいんだ。それに、個人的に俺はあいつのことが好きだしな」白銀は少し笑った。

「すみません、全く理解できません」

「危なすぎる、と石上は思った。道留が何かしたら会長の任命責任も問われる。そんなれば立場は危うい。そして生徒からの単純な印象も悪くなるだろう。」

「うん、理解する必要ないよ」とつぜん扉が開いて道留がそう言いながら入ってきた。

「道留!?今日は来ないんじゃないのか？」白銀はついつい大声をあげてしまう。

「いや、めんどくなくなったから約束断ってきた」

彼はソファーに座る石上に向かい合って座る。

「で？ 本人が登場したわけだけど、何か聞きたいことは？」 道留が石上の目を覗いて尋ねた。

「先輩があのとき、自分のために尽力してくれたのは知っています。だから先輩は人の気持ちができる人だと思っていました」石上が言う。「僕は勘違いをしていたのですか？」

「例えば俺が『君は勘違いをしていない』と言ったとして、君はそれを受け入れられる？」道留が問いかけた。

「受け入れられます」

「心のそこから？」

「はい」

「ところで君が俺の言葉によつて意見を変えたとしても、俺の君に対する評価は変わらないことを伝えておく。事態の優位性も変わらない。さて、いま君は心の底から受け入れられると言ったが、それは見栄じゃないよね？」

普段とは異なる雰囲気、石上は少し戸惑った様子を見せたがすぐに頷いた。

「ああ、そうなの。じゃあ言うけど、人の気持ちくらいわかるよ」道留は笑った。

笑っていたがその実、彼が石上に幻滅したこと、白銀は気づいた。道留がどういう人

間かというのを白銀はある程度わかっている。

彼は会話の中で相手が自分の思考レベルに達していないと判断した場合、その人間への興味をほとんど失い、自分をただ飾り付けるためのものと見なす。人間が会話のできない羊の毛を用いてセーターを作って着るのと似ている。このとき、セーターを着ている彼と会話ができるのは、彼と同じように服を着る人間という動物だけだ。

白銀のこの分析は、部分的に正しい。

「ならどうして浮気をするんですか？ どうして先輩のことが好きな子を酷いやり方でふっってしまうんですか？」

「え、なんでそのこと知ってるの？」道留がキョトンとした表情で聞いた。

「クラスで泣いてました。西園先輩がこんなにも好きなのに、ブサイクだって言われたって。風紀委員のヤツが休み時間の度に話聞いてあげて、それで先輩がどんな人間か、大体はわかったつもりでいます」

「萩野くんと同じだと？」

「ええ。先輩が人に優しくするのは先輩が良いイメージを獲得するためです。それを偽善と言うんじゃないですか？」

「さっきなんで浮気するかって質問だけど、それは俺に泣かされる女が悪いじゃん？ 次の……」



「ふざけないでください！」石上が立ち上がったて怒鳴った。「何が人の気持ちかわかるですか！わかるうともしてないじゃないですか！」

「わかるよ」道留は一切変わらぬ口調で言う。「浮気をされた、酷いふられ方をしたという事実が、彼女らの心にどう影響するかわかつてる。そしてその影響がとても些細なものだということも」

「理解できない」

「理解する必要はないって。さつきも言ったよね？」

白銀も石上に同意である。道留の恋愛観は乾いているように思えた。何が彼をそうさせたのか、白銀はまだ聞くことができないうる。しかし仮説は立てた。それは、『彼は恋をしたことがないのでは？』というものだ。検証はできないが。

白銀は石上に同意する一方でいまの発言で道留の石上への評価が定まったと確信した。この評価が覆るものなのかどうかまでは白銀はしらない。

「白銀会長も、なんでこんな人を……」石上は肩を落としていた。

「こいつの価値観は特殊だ。俺には一生獲得できないし、するつもりもない視点で物事を見る。その特異性ゆえに、生徒会運営において、こいつの着眼点はかなり役に立つ。俺や四宮が見ようとしてもしなかつた部分を指摘してくれる。だからだ」白銀は言ったが石上はこの言葉に頷かなかつた。

「それが彼の道徳性の欠落を補っているとお考えですか？」石上が道留をちらりと見て言った。

「道徳性が欠けているかいないかは、間接か直接かの違いに等しいね」道留が口を挟んだ。「ちなみに俺は軽い関係が許されるような女にしか手を出さないからさ、これだけたら君にも理解ができるだろ？」

「どういうことですか？」

「バカ高校のクソピッチとしか付き合わないようにしてんの」道留はかつたるそうに言った。「浮気前提の関係。いつ切っても切られてもいいっていう関係。なのに束縛されたり浮気して泣かれたら、ふざけんなって思うのはこつちの方でしょ？」

「それなら、まあ……理解できなくてもないですけど」

「素直になりなよ」道留は笑った。「そんなガバマンコ相手だったら、別に良いかなって思えちゃったでしょう？」

「酷いふり方をしたのは？」

「それわかんなくてね、考えたんだけど……たぶん、汚れた関係に真つ白な子を引き込むのは気が退けるから。傷つけて、二度とこつち側に近づかないように」

石上はまだ厳しい表情をしていたが道留の行動の意味に一応は納得したようだった。

「じゃあ仲直りしろ」白銀が言った。

「小学校かよ」道留が文句を言う。

「いいから握手しろ」

道留が手を差し出した。石上もゆっくりそれを握る。

「ちよっ！痛い痛い痛い！」石上が手を引っ込めた。「ゴリラかなんかつすか？先輩は！」

「失礼かよ」道留が笑う。

それを見た白銀はほっとした。一応は穩便に事が済んだようだ。

「じゃあ今度飯行くか」白銀が言った。

白銀にとつては道留も石上も同等の友人なのである。

石上は嫌がったが、どういうわけか道留は乗り気だった。渋る石上を二人で丸め込んで日程を調整すると、道留は帰っていった。

二人になると白銀は石上に言った。

「ほら、悪いヤツじゃないだろ？」

「表面上は、ですが」

白銀は苦笑した。



早坂愛はいつもより遅い時間に湯船につかった。無論、浴場を独り占めするためだ。温度は47度。スピーカーをセッティングし、アルミの椅子を浴槽に沈める。

熱いお湯に浸かりながら考えるのは今日の昼間のこと。西園道留との会話のなかで保留した二点についてだ。

ひとつめ。自分と同じように自らを偽る人間に分かつてもらいたいのか。

現状、自分のことを似た立場から理解してくれる人間はいない。ゆえに無意識のうちに求めてしまっている可能性はある。

それは自分が西園道留について調査を始めた理由がどこにあるのかを考えれば明らかになるだろう。彼との最初の接触は、彼が告白されている現場に居合わせてしまったときだ。彼は自分の正体を暴きかねない鋭い思考を持っていた。そう、だから四宮家の驚異になりかねないと思って調査を開始したのだ。

そこに下心は無かったか？彼の推理力の特異性に危機感を覚えると同時に、普段の彼との差異を見つけている。そこに、自分との共通点を見いだしたのは？

彼女は自問したが答えられない。その答えはジークムント・フロイトが存在を指摘し

た無意識の中にあつた。故に一人での解決は難しい。しかし主人であるかぐやに精神分析を頼むのは彼女のプライドが許さなかつた。だから他のサンプルを検討せねばならない。

二度目の接触は遊園地。西園道留は自分の変装を難なく見破つた。それが自分のプライドをある程度傷つけたのは確かだ。それ以上に彼の存在の危険性を知つた。だから、彼の調査をより進めたのだ。これは、自分のためではない。

そう言いきりたかつたができなかつた。彼に傷つけられたプライドがある。その挽回という理由が成立してしまふ。

そして彼が家族連れを見る表情。あのとときに自分は、彼に興味を持ったのかもしれない。いや、持つたのだ。もちろん、四宮家の驚異を排除したいという思いがほとんどを占めていたが、彼に対する単純な興味もそこには含まれていた。早坂はそう自己分析をした。

これ以上考えても仕方がない。自分は個人的理由で彼に興味をもっている。それは認めなければならぬ。早坂はそう結論付けた。

ふたつめ。彼の二面性は友達が欲しいからという理由のみによるものではないと感じたが、それは自分の願望が反映された結果なのか。

ひとつめの議題が、彼に興味をもっていると締め括られた時点で、願望であるという

ことは認めざるを得ない。しかし、彼が友達というものにそれほど価値を置いているとはどうも思えないのだ。結局これも願望にすぎないのかもしれないが、それだけでは説明がつかない部分が多々ある。

早坂は少し考えて、スピーカーの上に置いておいたスマホを手を取った。LIMEを開き、クラスグループから西園道留を友達に追加する。そして少し考えてから決断し、彼に電話をかけた。彼はすぐに出た。

「なに？告白でもする気？」いつも通りの口調だった。

「まさか」早坂は一笑に付した。「少し聞きたいことがあって」

「昼間に聞いておけよ。勘違いさせる気か」彼は軽口を叩き続ける。

「遊園地、なんで変装がばれたかだけでも教えてもらえないですか？」

今回、彼女には勝算があった。彼は自分に素を見せている。つまり、ある程度の好感度は獲得しているということだ。そんな人物がわざわざ電話をするのだから、無下にはしないだろうという考えだ。その見込みはあっている。道留は彼女のことを会話のできる人間として認知していた。

「仕方ないなー」と言って道留は話を始める。

遊園地に行く前から早坂愛が四宮家に仕えてることを予想していたこと。遊園地に行くにしても、護衛が来ないことはあり得ないと考えたこと。頻繁に目にするカップル

が護衛だろうと思つたこと。女の身長が早坂の変装で調整できる範囲だつたこと。

「え、それだけで……？」早坂は困惑した。何一つ確実なことはなかつたからだ。

「いや、早坂が無線で俺の話をしてたからね。そうしてくれなかつたら、カツラに手を伸ばしてなかつた」

「一種の賭けだつたわけですか」

「勝つてよかつた」

「落ち込んで損しました」彼女は不満げな声を出した。「それじゃ切りますね」

道留は次の話題をふつてきていたが、それを無視し宣言通り早坂は通話を終了した。スマホを元の位置に戻し、計画を練り始める。

それは、一種の潜入捜査である。他校の生徒になりきつて、彼の何人目かの恋人になるといふものだ。自分の変装を見破つた理由が、変装の未熟さに無かつたため、このよくな作戦をとれると判断した。

チャンスは夏。人の色欲を煮詰めて、濃縮させる季節。赤い夏だ。

四宮家のためなどと言うつもりはなかつた。自分の興味のためだ。悔しいけれど西園道留の倫理観が参考になる可能性が高い。役に立たなかつたならそれまでだ。しかし結局、自分は彼に期待している。早坂は溜め息をついた。

○

早坂愛の主人が風邪をひいた。あの土砂降りの中で立っただけで濡れになったのだから当然のことだ。ゆえにかぐやは学校を休んだ。それにもない、早坂も今日は一日家にいる。

退屈していると来客を知らせる呼び鈴がなった。予想の範疇だ。モニターでチェックしたところ白銀の横に西園道留がいたが、この可能性があることも彼女はわかっていった。しかし動機は不明。白銀とかぐやのことを応援するのなら、ついてこない方がいいとどうして判断しなかったのか。どうやら面倒なことになったらしい。あとのことを考え、彼女はため息をついた。

門を開け、早坂は玄関へと移動する。その際カラーコンタクトをして、胸に詰め物を入れることを忘れなかった。そして彼らの前に顔を出すと、外国人訛りの日本語で自己紹介をするのだった。

「スマーシー・A・ハーサカです。以後お見知りおきを」彼女は恭しくお辞儀をした。顔をあげるとメイドの存在に気後れた白銀の表情と、道留の実になんとも言えない表情が視界に入ってきた。笑いたいのには笑ってはいけない。指摘したいのに指摘してはいけない。その感情が中和しあって、なんとも言えない表情になっていた。早坂には



その表情が本当に腹立たしかった。

彼らを招き入れ廊下を歩いた。

「あの、メイドさん」道留が言った。「おトイレ貸してもらっても？」

これは嘘だと確信できた。どうやら彼らを二人きりにするという意図はあるらしい。じゃあ、なんでここに来た？早坂は考える。例えば盗聴機の設置。しかしその目的は？

とにかく、道留を一人にするのは危険だ。

早坂は白銀に、かぐやの状態と部屋の密閉度とそれを取り巻く環境が、白銀にとって、いかに都合が良いものかを伝えた。白銀をかぐやの部屋へ入れると道留を引き連れて別室に移動する。

「メイドさん、ここで出せと？」

「目的は何ですか？」早坂は無視して言った。

「暇つぶしですよ」道留はスミシシー・A・ハーサカの口調で言った。

腹が立ったことに加え彼の回答に納得がいかなかったので早坂は眉をしかめた。そんな彼女の表情を見て、道留は笑った。

「盗聴機とか仕掛けに来たんじゃないか、そうでなくとも四宮家に不利益になることをしに来たって思ったでしょ？それで俺を一人にしとくわけにはいかないと思って、別室に移動」

正解である。正解であるが、プライドのために早坂は正解だと言えない。早坂は彼の言葉をもとに思考をスタートする。

いま彼は自分の思考をトレースした。この状況、つまり別室に隔離されることは事前にも予測できていたのかもしれない。いや、きつとできていた。だから諜報活動は目的としていない。

待て、そう言いきるのは早計だ。自分を出し抜ける自信があるのかもしれない。じゃあその諜報活動の目的はなんだ。たかが別邸に入り込む意味はなんだ。情報売りさばきたいのか？ 彼はお金には困っていない。個人でマンションを所有しているくらいだ。彼がそんなことをするか？ いや、しない。そもそも彼は四宮かぐやを、そして自分をそこそこ気に入っているようだ。ならば、彼がこちら側に不利に働きかけることはない。だから目的は諜報活動ではない。

じゃあ目的は。

「私、ですか？」早坂は固い声で言った。彼女の考えではそれがもつとも可能性のある動機だった。

「うん、正解」

『愛はかわいいから、目えつけてるかも。気を付けて』早坂は友人の言葉を思い出した。彼は秀知院の生徒には手を出さないらしい。しかしこれは保身のためだと早坂は知っ

ている。弱味を握られている自分は例外かもしれない。早坂は出口を確認した。万が一のときには身を守らねばならない。

道留はバッグをまさぐっている。たぶんろくなものが出てこないだろうと早坂は思った。数歩だけ出口に寄る。

「はい、これ」道留はプリントを差し出した。「かぐや様の分も一緒だから」

早坂は、一瞬だけ理解ができず硬直した。

「あ、プリント……」

彼女は自分が検討違いなことを考えていたことを悟った。思わず顔が熱くなる。そうだ、自分が四宮家に仕えていることを知るのは彼のみ。つまり自分にプリントを届けられるのも彼のみだ。彼はある種の義務を全うしに来たに過ぎなかった。

「ありがとうございます」赤くなった顔を隠すように、うつむきながら彼の差し出したプリントを受け取った。

「めっちゃ赤くなってるじゃん」道留が笑う。早坂は自分の顔をプリントで隠した。俺ってそんなに信用無い？」

「無いです」断言する。

「ああそう。残念」彼は全く残念そうでない声で言った。「じゃあこの後用事あるから帰るね。あの二人がどうなったか気になるから、後で教えて」

「え、あ、はい。お気をつけて」早坂は部屋を出ていく彼の背中を見ていた。

○

正面ではなく、裏口の玄関まで来た西園道留は早坂がついてきていないことを確認すると、いくつかに別れていたシューズボックスを一つずつ開けて、目的のものを探し始めた。三つ目の場所を調べたとき、彼の目は秋から冬に履かれるだろうブーツに注がれていた。彼はここに来る前に Twitter で早坂が投稿した写真から彼女が去年使っていたブーツを確認していた。それがこのブーツだ。

道留はポケットからレゴブロックを取り出す。そこには油性ペンで二行にわたって文字が書かれている。ブーツの中にそのブロックを入れ、付けた指紋をそのままに、彼は屋敷を後にした。

四宮の別邸を訪ねた日の夜。雲の向こうで欠け始めた月が薄く光っていた。道留はマンシヨンのベランダでタバコを吸っていた。煙で肺を満たして、ゆっくりと吐く。吐きながら今日の自分の行動について考えていた。

どうして自分はあの日付を早坂に教えるのか。

実行前とその最中は行動を客観視することは難しいというのが彼の持論だ。振り返ってみてようやく分析と呼べる分析ができる。

すぐに認めざるを得ない事実を頭の端から真ん中に移動させた。それは彼が早坂愛に興味を抱いているということである。それも、白銀やかぐや、藤原に並ぶほどにである。

では何にそれほど興味をひかれたのか。顔だろうか、と彼は思った。そのような危険な印象は排除すべきだ。自分が彼女に恋愛感情を抱いてしまったら、それはきつと腹立たしいことだ。

しかし彼はここで、恋愛感情を抱いていないと考えたい自分に気が付いた。論理的な検証におけるこのような主観は排除すべきである。ゆえに彼は人間に可能な分だけ主

観を取り除いた。

その土台の上で話の道筋を考え始める。煙を吸い込んで、同時に生まれる涼しさを頭の方に流して。それをしばらく繰り返した。やがて一つの結論に達する。

その結論に彼は心から安堵した。自分が彼女に抱いている興味は恋愛感情などではない。その興味の原因は彼女の適度な思考速度にあった。かぐやでは速過ぎ、白銀では遅すぎ、藤原は論外。そんな中、早坂の思考速度は道留が遊ぶのにはちょうどいいのだ。いい勝負になるが最後に勝つのは自分だという見込みがある。

彼女がああレゴブロックを見つけてるのは秋冬。だから彼女に与えられる時間はだいたい二ヶ月程度。

日にちの都合を考えてみて、突発的なアイデアだったレゴブロックのメッセーじがかなり整合性のとれた要因になっていることに気づいた。早坂が探偵役としてはベストだということにも。

「面白そうだからその方向で動こう」言ってタバコの灰を落とす。

しかし彼は計画の詳細を詰めるのを後回しにした。もう少し目先の些事を考えたくなったのである。

道留は白銀とかぐやの関係のことを考えた。キレイな恋愛をしたことのない道留には彼らがどこか眩しくみえるのだ。彼らは恋愛に重きを置いているようなので、成就さ

せて幸せになってほしい。だから彼らをアシストしてきた。縁を切るまでは続けるつもりである。すると気になるのはかぐやの部屋で何か進展したのか、だ。

彼はスマホを手を取った。

○

お湯に浸かって頭を空っぽにして、お湯の温もり体を預けていた早坂を、スマホの着信音が襲った。

画面を確認した早坂はため息をついて電話に出た。

「なんででしょう」

「なんか発展した？」彼女なら理解できるだろうと道留は会話の導入部を省略した。

「同衾まで行きました」

「はやっ！まじで？」道留は心から驚いた。

「まじです。白銀会長がかぐや様のベッドに潜り込みました」

「白銀にそんな勇氣が……」

「かぐや様が引きずり込んだ可能性も否定できませんが」

「なにそれ」

「かぐや様、意識が朦朧としてたんで」

「で、同衾しただけ？」

「しただけです」

「チキンかよ白銀」

「欲望のコントロールがきちんできていますよね、あなたと違って」冷たい声だった。

「ひどい言い様。オブラート、忘れてない？」

「覚えてましたよ？ 残念ながら包み切れませんでした」

「じゃあ仕方ない」彼はすんなり引き下がった。「ねえ、風邪ひいてるかぐや様はひいてるとききの記憶がないって本当？」

「本当ですよ。ですからあなたの予想通り、ひと悶着ありました」

「長引きそう？」

「まあ何日かは」

「恋愛相談に来てくれるかなあ？」道留は期待を込めて言った。

「無いでしょう。あなたの量産型恋愛とあの人たちの上質な恋愛は、もう別物といっても過言ではないですから」

「上質で」道留は笑った。「外側をどんなにきれいに作っても、中身は変わんなくない？」

「外側を飾るのは重要なことです。あなたも別のところでやっていることでしょうか？」



「飾って失うものもある」

「素材の良さとやらを語るつもりですか？」

「違うよ。飾ることに頭を縛られたくないだけ」

「あなたが目指しているのは獣ですか？」

「その逆。本能を排除できるならそうしたいね」

「矛盾していませんか？その発言とあなたの行動」

「うん。だからさ、その矛盾を必死に解消しようとしてる」

「どういうことですか？」

「自分で考えなきや。俺は理解してもらおうとは思ってないんだから」彼の口調にはト

ゲはなかった。「でもね、楽しいよ。お前と話すの」

「私、秀知院の生徒ですよ。見境なくなりましたか？」

「だとしてもあり得ないね、早坂愛は」彼は笑う。「あんなに語尾に『し』が付く女、な

んか嫌だわ」

「バカっぽく見えるでしょ？」早坂は微かに笑う。

「恥ずかしくなんないの？」

「仕事ですの？」

「仕事ねえ……」

「私も楽しいですよ、あなたと話すの」

「秀知院の生徒さんは受け付けてませーん」

「前々から思ってたんですけど、その決まり何で作ったんですか?」

「だって秀知院で敵を作りまくったら白銀に迷惑かかるじゃん」

「えー、意外とまともな理由……」

「そんなに驚くことかね」

「気にしなそうですから」

「失礼じゃん」

「そういう印象を与えてるのはあなたじゃないですか」

「否めない」

「一人に尽くそうって気にはならないんですか?」

「何が楽しいのそれ。植物育てるのと似てる?」

「共通部分がありますけど、ほとんど違います」

「わかんねー」

「でしようね」

「早坂はどうなのさ。浮わついた話、一切聞いたことないけど?」

「そんな暇、私にはありません」

「そういうもんか。勿体ないな」

それから他愛もない話をした。思えばこうやって彼と友達みたいに接する機会はあまりなかった。やがてお湯に使っているのも飽きてきてそれを言う。「じゃあそろそろ切るね」と宣言して彼は通話を終了した。

○

お財布に優しい価格設定で学生に人気のファミレス。今日は休日なので制服を着た学生はほとんどいない。代わりに部活動のウィンドブレーカーを着た活発そうな若者たちが店内を賑やかな若さに彩っていた。

その店内の端の四人席に白銀、石上、道留が座っている。白銀以外は私服姿だ。

全員がドリンクバーから帰ってきたところで「ちよつと相談事があるんだが……」と白銀がおずおずと切り出した。

かぐやとの同衾から数日。白銀は相談相手を欲していた。一応和解はしたものの、あれ以来かぐやとまともに話していない。どうしたら元通りになるのかと彼は悩んでいた。

真つ先に彼の脳裏に浮かんだのは彼の親友である西園道留だった。女を簡単に手玉

に取ることができると彼に相談すれば進展するのは明らかだ。

しかし白銀は気が進まない。自分と彼の恋愛は別物のような気がするし、そもそも白銀は恋愛ごとについて彼と話すのをなるべく避けていた。それは見たくない彼の一面を目の当たりにする可能性のある行為だからである。心を許せる友人が多くはない白銀にとって、彼の存在は貴重であり、失いたくないものなのだ。

次に石上に頼ろうかと検討した。石上なら自分と同じ価値観から意見してくれることが予想できる。だが、道留と比べたとき、どうも力不足な気がしてならない。モルヒネを処方してもらおうか、市販の弱い薬でどうにかするか悩むときの気持ちに似ているなと白銀は感じた。

悩んだ末に白銀は二人ともに相談することに決めた。色々な意見が聞けた方が問題解決に向かいやすいだろうという判断をしたのである。また、男子会を開催するという事実がその判断を下すのを手伝っていた。

「恋ばな？」道留が聞く。

「まあ、他人の話だけだな……」白銀はごまかした。

「それじゃあ会長の話みたいに聞こえますよ」石上が指摘する。「そんなベタなことは無いと思いますか」

「その前振りが無いと、もっとお前の話っぽいけどね」道留が笑う。

「まあとにかく、俺の友人Aとそいつが好きなBの話だ。何か用事があったらしく、AがBの家を訪ねたんだ。するとBが風邪を引いてたらしい。Bの親が顔を見てつてくれと言うからAはBの部屋に入った。んで……」

「ちよつと待て白銀」道留が白銀の言葉を遮った。ニヤニヤとエクボを作っている。「そのとき、Aといっしょに友人Nがいなかった？」

白銀は硬直した。友人N。CでなくてわざわざNを使っている。N i s h i z o n oである。白銀はバレてることを悟った。即座に否定すれば良かったものの、間が生まれてしまったので誤魔化しようがなくなった。しかし石上にはバレていない。さっさと認めて被害を最小限に食い止めるのが良いと判断をした。

「そう、Nがいたな」白銀はしぶしぶ言った。

道留の笑顔が腹立たしく感じる。白銀はそこでふと思った。この相談が白銀自身のことであると知っているのは当人と道留のみ。石上はもちろん知らない。

白銀は考えた。これも、いわゆる仲間外れに該当するのではないか？もともと三人で仲良く話そうという日だったのに、一人だけに秘密にして話を進めるのはおかしくないか？もし俺が同じことをされていたら、どう感じる？

白銀はそういう優しい人間である。

「……………いや、実はな、これ、ベタなパターンの、ヤツだ」言葉を区切りながら言っ

た。

「どういうことですか？」石上が聞く。

道留は相変わらずニヤニヤしていた。殴ってやりたい衝動に刈られる。わかっているならお前が説明しろよと思つたが伝わらなかつた。

「この相談はな、ほら、石上、自分で言つてたろ？これな、ベタなパターンの相談だ」白銀は赤面して言つた。目線を下げ、テーブルに貼り付いた広告を注視する。

「え…… あつ！」石上は理解した。「まじつすか会長！じゃあNつて西園先輩で…… 二人で家に行つたつて、お見舞い…… 四宮先輩！え！四宮先輩！」石上のテンションが上がつた。

「大正解だ」道留が言いながら石上の背を叩く。なんでお前が言うんだと白銀は思った。「それで、何があつたんですか？」石上が聞く。

「あー、睡眠の意味の方で、いっしょに寝た」白銀は詳しい説明を始めた。お見舞いに行つたらかぐやがアホになつていたこと。ベッドに引き込まれたこと。かぐやは白銀をベッドに入れたことを覚えていないこと。

「睡眠の意味じゃない方で、寝てしまえば良かったのに」道留が言う。

こいつを連れてきたのは失敗だったと今更ながら思う白銀だった。

「いや、何もなかつたよ。マジで」何もしないためにとても頑張つたことは伏せた。「け

ど何かしたのかと問い詰められた。もちろん、何もしてないと答えた。事実だからな。疑ってる様子だったんだけど、それは誤解だったとわかってもらえたみたいで。お互い謝ったんだわ。けど以来ちゃんと話せてないっていうか、ぎくしゃくというか、避けられてるとまではいわないけどさ……」

「ごめん！一応確認するけど、誰との話？」道留が真面目な顔をして言う。明らかに作り物だった。

「会長、この人めんどくさいタイプなのでスルーでいいと思いますよ」石上が淡々と言う。

もし石上だけに打ち明けられていたならと思う白銀だった。

「で、どう思う？」

「どう接していいかわからないんじゃないの」道留がストローでコップの水をくるくるさせながら言う。「お前と同じように」

「それ、ほんとか……？俺が嫌われたって可能性は？」

「あるけど、それ考えてどーすんのさ。何か良いこと起こる？」

「四宮が嫌いなら、俺と居て嫌な気持ちになるなら、あいつから退くべきだと思ってる」

「そんなレベルで嫌われてたら、とっくに四宮家の力で生徒会長辞めさせられてるだろ」

「いやまあ、そうなんだが……」

「俺も嫌われないと思えますよ。結局のところ、時間が必要なんです」

「それっぽいこと言うじゃん、童貞のくせに」道留が笑った。

「童貞じゃないです」石上が言う。

「え、マジで？」白銀は空気の抜けたような声を出した。裏切られた気分だった。

「嘘です」

石上の声に白銀は安心した。生徒会の中で自分だけが童貞なのは居心地が悪い。

「まあとにかく、いつも通りにしてるのが一番だと思えます。お互い謝ったんですし」

「いつも通りか…… そうだな」白銀は目を閉じて頷いた。解決策は劇的なものとは限らない。

「で？どこが好きなの？顔？」道留がニヤニヤしていった。

「それは言えん」白銀はこれから始まる猛攻を予期して顔をしかめた。

「会長、それはズルいですよ。相談に乗ったんですからそれくらい良いじゃないですか」

「そうだぞ。誰のお陰でかくや様と遊園地に行けたと思ってる」

「え、あのときからバレてたの？」白銀は目を丸くして尋ねる。

「いや、生徒会に誘われて三日目くらいから。よく思い出せ、俺の発言がきっかけで二人きりになることがよくあっただろう？」

確かにその通りである。何となくその気はしていたが彼の立ち振舞いはわざとだっ



たのか。白銀は自らの恋心を見破った道留の観察力に舌を巻いた。

「奥手なお前のために、夏休みも旅行に行く提案をするつもりなだけどなー？」

夏休みの旅行はあまりにも美味しすぎる提案だった。彼は決意した。

「…………… 最初は冷たく、無愛想な印象だった。お高く止まってるとも思ってた。け

どな、実際のところ、とても優しく、行動力があつて、少し寂しがり屋で、臆病で。何

て言うんだろうな、垣間見える暖かさにすごく惹かれるんだ」白銀は言い切った。

「べた惚れじゃねえか」

「ですね。甘すぎて吐きそうです」

「全くの同意見だ。体全身がかゆいわ」

「こんなに一気にぶっちゃけると思ってますよ」

「とにかく、応援するよ。な？」

「もちろんです。お似合いだと思いますよ」

白銀は嬉しかった。二人の言葉と、二人が仲良くなってきたことが。

○

「ねえ、気持ちよかった？」

オレンジ色の薄暗い照明の下、二人とも裸のままベッドに転がっていたが、道留は女に背を向けていた。上がった体温はまだもとに戻りそうにない。だが理性は既に道留の感情を支配していて、行為が終わったことに課題を完成させたときに似た安心感をもたらしっていた。

「ねえ」女が言う。

「何？」

「どうだった？」

「よかったよ」丸い口調を心掛けたが、粗削りのまま口から出た。消耗してるせいだなと道留は思った。

道留と女は体だけの関係である。少なくとも道留はそう思っているし、考えが変わることはない。今はただ、汗を糊にして体に貼り付くシートが不快だった。

「ホントにドライだね」女が呆れたように言った。

「悪いね」事務的な返答をした。

シーツの擦れる音がした。女が道留の胸に手を回して自分の体を彼に寄せる。柔らかな乳房が道留の背中に触れた。他人の温もりが彼にまとわりつく。

彼は女の手を自分の体から乱暴に引き剥がすと体を起こした。自分の行動とは反対に、血の巡りがまた早くなっているのを感じて死にたくなる。ベッドに手を置くと女が

その手を両手で握った。彼女も体を起こす。道留はその手を再び振り払おうとしたが、今度は女は手を離さなかった。道留は抵抗をやめた。

「何？」道留はできるだけ冷たく言った。目線を女から外し、女の言葉を待つ。

女は答えない。女はこの沈黙が破れたとき関係が終わると思っているのではないかと道留は感じた。道留は待った。女の手のひらのぬるい感覚が不快だったけれど、じつとして、黙っていた。

女が鼻をすすって、沈黙は破れた。道留はゆっくりとした動きで顔を彼女のほうに向けた。窓の外の薄い明かりで、女の目から大粒の涙が落ちたのがかろうじて見えた。

「何、泣いてんの」道留は言う。今度はきちんと優しい声が出た。

「好きなの」女が涙混じりに言った。道留の手を握る力が少し強くなる。「今みたいな関係じゃ、もう嫌なの」

「そう」

「葵は、私のこと、どう思ってる？ただの……」女は続く言葉を、彼女にとつてはとてつもなく残酷な言葉を声にできなかつた。

葵というのは、彼が女と遊ぶときに使うもう一つの名前。女は道留という名前を知らない。それがこの関係の全て。

「セフレだよ」道留は言った。「ただのセフレ」

彼女の嗚咽は押さえきれぬ程度を越えていた。道留は泣かれるのには慣れていた。こういうときは無理にでも振りほどいてシャワーを浴びて、一人で出ていくのが楽だということを知っていた。ただ煙草が吸いたかった。彼女に渡した連絡先も遊ぶために作ったものだったから、さして問題にならない。だから彼の大部分は、彼の一部がやろうとしていることに批判的だった。

彼は体を女のほうに向けた。空いている方の手を女の頭の上に置く。女が顔をあげた。驚きと期待が半分ずつの顔だった。彼は女を抱き寄せた。その瞬間、女の手は彼の手を握るのを止め、代わりに背中にまわって強く抱きついた。彼の胸の辺りを女の前髪がくすぐる。

しばらくすると、女は泣き止んだ。彼に抱きつきながら、頭を愛撫する彼の手を感じていた。

「俺のこと、愛してる？」道留が問う。

女は彼の胸から顔をあげて、笑いながら泣いて、頷いた。

「愛してる」女は彼の目を見て言った。

道留の手は彼女の頭を撫でるのを止め、頬のところまで降りていった。頬は桃色をしていた。もう片手も頬にやって、二つの親指で女の目に残った涙を拭う。そして笑みを浮かべると片手は背中に回し、女を手繰り寄せるようにして、柔らかくキスをした。道

留は自分の呼吸が上気していることに気がついたが、それは些細なことだった。

唇が離れた。女の瞳はとろけたような視線を道留に送る。今度は女の番だった。女は自らの舌を器用に彼の唇の間に滑り込ませた。道留もそれを拒まない。彼女の舌は何かを探し求めるように蠢き、同じように動く彼の舌と絡み合い、汚らしい水音を立てた。女は深く、深く彼を求め、彼はそれに答えることにした。お互いの舌がお互いの口内から滑り出て、粘性のある架橋を二人の間に作った。お互いに、鼻で呼吸することを既に諦めていた。道留の手が女の胸を優しく撫でる。女はわざとらしく嬌声を上げると、準備が出来ていることを知らせようと笑った。

道留は女を押し倒した。再び両手で彼女の頬を包むように触れると、身を屈めてキスをする。そのキスはすぐに終わって、彼の手はすると下へ滑る。首で止まる。頸動脈に血が流れるとくとくとくという感触が指に伝わる。その早さが女の興奮の程度が著しいことを伝えていた。両方の親指が首の真ん中に触れる。その真下には空気の通り道があつて、彼女の血の巡りのためにたくさんの空気を今も肺に送っていることを、彼はもちろん知っている。

親指に力をいれた。

五。

体重を乗せる。

氣道を潰す。

万力のような力を込め、

四。

締め上げる。

殺すために。

女が苦しそうにひゅつと息を鳴らした。

耐えろ。

心から思う。

女は抵抗をする。

抵抗してしまった。

三。

この手を引き剥がそう。

女の手は生を求めもがく。

男の手を引き剥がそう。

二人の手が、また触れた。

すると道留はあつけなく手を離して、笑った。女が跳ね起きて、咳き込む。

「ごめん、やりすぎた。俺、ちよつとSなんだよね。いじめたいの」そう言つて、女の背中をさすり始めた。「ごめんごめん、このレベルのことは、もうしないから」

「うん、あー、だいじよう……いや、だいじよばないけど、うん」女は混乱しているようだ。

「嫌いになつた？」

「ううん！ちよつとビツクリしただけ！」そう言つて笑うとまた横になる。「えと、苦しいのは怖いけど、恥ずかしいこと言わせられるとか、叩かれる、とかなら平気だから、えと、その……」女の顔が真っ赤になる。それが自分でもわかつたのか、女は手で顔をおおつた。

「その？」道留はニヤつと笑つた。

「えと、いじめて、いいよ……？」指の間から目だけ覗かせて言う。

このあと滅茶苦茶セックスした。

し終わると、女はくたくたに疲れて深い眠りについた。そのうちに道留は一人シャワーを浴び、メビウスに火を付け、着替え、女の手をとり、女のスマホの指紋認証を解除し、真方葵に関するデータをすべて消すと、自分の財布の中から福沢諭吉を五人ほど召喚し、枕元に侍らせ、タクシーを呼び、自宅へと帰つた。

ただひたすら、残念だった。ほらねと彼のある部分と言う。その声に、期待した自分

がバカだったと反省する。自分にとっての愛は、セックスでも、もちろんSMプレイでもない。あの女の愛は自分にとっての愛とは、まるで別物だった。



「よし、これで終わりだ」白銀が書類に印を押し終えた。

道留は白銀のこのアナログな仕事を見る度に、スマホなどのデバイスでできないものかと思ってしまう。その方が作業効率的にも環境的にも良い結果をもたらすことは目に見えているし、そもそもこのご時世、紙媒体にメリットはない。しかしながら今日の仕事は普段より早く終わった。いつもは遊び惚けている道留がまともに仕事をしたためである。会長が雑務をしなくて済んだのは大きい。

「お疲れ様です、会長」かぐやが白銀に話しかけた。彼女の言葉に何でもないように返答する白銀だったが道留には、そしてきつと石上にも白々しく思えた。

白銀とかぐやはあつけなく仲直りした。道留は白銀から感謝の言葉を聞いてそれを知った。仲直りしたその日のうちに生徒会男子三人のLIMEグループに仲直りを報告する文言が届いたのである。道留が成就させるために努力は惜しまない旨を伝えるとその翌日、白銀は「持つべきものは、友達だよな！」とホクホクした表情で笑いながら道留の背中を叩いた。道留が友人に対して可愛いなという印象を抱くのは初めての事だった。

そして今日、道留による藤原を利用した大規模な白銀の恋愛成就計画が始まる。もちろんその本質を藤原には教えていない。

「西園庶務に藤原書記。俺らに何か提案があるんだって？」白銀が言った。内容を深くは教えてないが道留はプレゼンをすることをそれが白銀にとつてきつと良いものであることを伝えていた。

「うん。ちよつと画面借りますね」道留はそう言うと言壁に埋め込んである巨大な画面にノートパソコンを無線で接続した。最新の設備だ。さすがは秀智院といったところか。何やら操作をして、すぐに親指を挙げて藤原に合図を出す。

藤原は画面の横に道留と並んで立ち、他の三人の方を向いた。わざとらしく咳払いをして話始める。

「私はこの生徒会が、結構気に入っています。みなさん優しくしてくれるし、楽しいです。でも今は七月。もうすぐ夏休み。そうなると、みなさんとはなかなか会えません。夏が終わるとまた会えますが、十月には生徒会は解散。このメンバーで集まるなんて、珍しいことになってしまいます。それは、寂しいです。実を言うと、6月の終わり頃から私はそう思っていました。何か思い出が欲しい……。一方その頃」

「何か思い出が欲しい……。青春したい……。僕もそう思っております。例えば

石上を含めたメンバー全員でどこかに出掛けたことがない。その事を千花ちゃんにぼろつと言ったのが二週間前。意気投合したのもその日でございます。ということで、本日は皆様に提案させて頂きたいのはこちら！」

「千花と〜！」

「道留の〜！」

「生徒会旅行計画〜！」

藤原の声に合わせて画面に『生徒会旅行計画』の文字が点灯、踊り出す。楽しい音楽が流れ始めた。そして歓声。これは道留が取って付けたフリー音源だ。

「ちよ、ちよつと待つてくださいい？」かぐやが二人を止めた。「ごめんなさい、私……家の許可が下りるかどうか……」

「心配ご無用でございます。ワタクシの個人的なつてにより、四宮の方々と交渉しました結果、国内かつ監視つきという条件のもと、かぐや様の旅行は許可されました!!」

かぐやは目を丸くして大きな瞬きを何回かした。そしてどうやら自分が（白銀とともに）旅行に行けることを理解し、晴れやかな笑顔になる。なお、道留のつてとは早坂のことであり、早坂に頼み込んで大人たちを説得してもらったのだ。実際のところ、この旅行が許可されたのは早坂の仕事によるところが大きい。

「さてさて、千花ちゃんから聞いたのですが、お二人は以前、行くなら海か山かという論

争を繰り広げていたそうで。それを知った私がどう思ったかというとは、はいこちら」道留が画面を切り替える。

『どっちも行けばいいじゃん』

「けど私は思いました。海は人も多いですし、その中には道留くんのような、えーと、道留くんみたいなタイプの人かなりの割合で含まれています。私とかぐやさんが行くには、危ないのかもしれない」

画面には夏のビーチの写真。変な輩が大勢いる。かぐやはともかくとして、爆乳の藤原は本当に危ない。

「そこで僕は四宮家の方にこう尋ねました」画面を切り替える。

『Q. プライベートビーチ持ってないの?』

また画面が変わる。

『A. ありますよ』

『Q. どういふ?』

『A. 例えば、熱海とか』

「というところで、熱海行きませんか!」藤原が楽しそうに言った。「海も山もあります。海の幸も山の幸もいっぱい食べられますよ!そして温泉も、さらには心霊スポットも!

どうでしょう!」

「熱海か。いいじゃないか、俺は賛成だ」白銀が平静を装いながら言う。いうまでもなく、心の中ではガッツポーズをして喜びを叫んでいる。

「いいですね、熱海。僕も賛成です」石上も言った。

かぐやにいたっては可愛らしい表情でしきりに頷いている。喜びで声が出てこないようだった。

白銀とかぐやにとつては自身の恋愛成就のための、藤原と石上と道留は思い出作りのための熱海旅行。日程は八月が始まってすぐに設定された。退屈な夏にはなりそうにない。

○

プレゼンをした日の夕方。道留はある洋風の豪邸を訪れていた。豪邸と言えど四宮の別邸には遠く及ばない。それでも一般家庭よりはずっと目を引く見た目をしていた。背の高い門の向こうには鮮やかな色の芝生が見え、何匹かの犬が木陰でくつろいでいる。芝生の庭の真ん中には両側を装飾用の石で強調してあるコンクリートの道があった。

道留は門の横の通用口を通って中に入るとコンクリートの上を歩いて玄関へと向か

う。犬は彼を見たが知らんぷりをした。それを不愉快に思いはしたが、道留は彼らとほとんど付き合いがないので吠えないだけましかなと思いなおす。

金属製の、それでも木目をあしらった大きな扉の前に立ち、事前に取り出してあった鍵を使つて中へと入る。この館は土足で立ち入ることが前提なので、道留はそのまま屋敷の奥へと向かった。途中、この家の召使とすれ違ったので互いに会釈した。四宮のそれと違い、お世辞にも美人とは言えない。目的地にたどり着いた。今度は本物の木でできた重い扉の前だ。二回ノックして、返事が返ってくる前に入室する。

「お久しぶりです、父さん」道留はできるだけ朗らかに言った。

部屋には複数の本棚が置いてあった。どの本棚も分厚い本でいっぱい、埃をかぶっているものが大半だ。これは召使がこの部屋に立ち入ることができないことを意味している。本棚に収まり切らなかつた書籍は机の上かその周りの床に山を作っていた。どれも経営、マーケティングに関するものだ。机の向こうでそのまさに一冊を読んでいる男が顔をあげる。

「おお、久しぶりだな」彼は眼鏡を上げながら言った。

道留の父で通信会社の社長の西園幸太郎である。白髪であることや顔のしわなど年齢に因るものを除いても道留と幸太郎は似ていない。道留の顔つきは派手だが、幸太郎

のそれは地味だ。二重と一重の違いや鼻の高い低いなどの違いが目立つ。顔のパーツの数などを除いて、似ているところを探すが難しいだろう。

「八月三日から三泊四日の熱海旅行に行くことになったので報告しにきました」

「ずいぶんとまあ律儀だな。どういふ風の吹き回しだい？」

「夏ですから、南から北に向かって吹きますね」

「土産、頼む」

「了解しました。失礼します」そう言つて踵を返す。

面会は一分もせず終了した。道留は彼の事が好きではなく、彼もそれを理解していた。他の家族は子供が大人になるにつれて、その感情が変化していくものだが、自分達は例外であることも二人ともわかつていた。

道留は家族と別居している。そうするのが良いということが誰が言うでもなく家族の共通の認識になっていた。道留が今日訪れたのが道留の親と姉が住む家で、道留はそこから二十分歩いたところにあるマンションの最上階に住んでいる。ちなみにそこから白銀の家までは徒歩五分だ。二十分の移動に、普段は社長の息子らしくタクシーを用いる道留だが、本邸から自宅へと向かうその道のりだけは歩いていくことにしていた。平常の域をはみ出た感情をどうにかフラットな状態に持つていくには徒歩の二十分が必要になるのだ。

金曜日だったので、解放されたサラリーマンたちが楽しげに話ながら道留とすれ違つていく。飲み屋は盛況なようで、町には顔を赤くした酔っぱらいがたくさんいた。アルコールが入っていない者の方が少ない。タバコに手を出す道留だから、もちろん飲酒をしたこともある。しかしどうも安酒を大量に飲むという行為は受け付けなかった。タバコは輪郭をハッキリさせてくれるが飲酒はボヤけさせる。少量を女と飲むのは楽しいが、一人で飲むにはそのボヤけた感じが道留には許容できなかった。飲酒がここまで好かれているところを見ると、人間はやはり考えることを嫌うのだろうと思つた。どの辺りがホモ・サピエンスなのだろう。

そうやって周りを見下しながら歩いていると知り合いを見つけた。途端にうれしくなる。父親のことなどどうでもよくなつた。彼は速度を上げて、彼女の肩を叩く。

○

白銀圭は時間を気にしていた。時刻は七時半。生徒会の仕事で忙しかつたので下校時刻いっぱいまで、いや、実のところ下校時刻を過ぎても彼女は作業していた。学校を出ると兄からの頼みでスーパーに行かねばならなかつたことを思い出し、指定されたものを買い、そしてやっと帰路につけた。牛乳パックをはじめとしたビニール袋の内容物



は思いのほか重量を持ち、圭の手に負荷を与え続ける。ずいぶんと遅くなってしまった。兄に小言を言われるかもしれない。そう思つてとにかく足を動かす。大声で話す酔っぱらいが、夜のこの街の雰囲気が怖かったのもそうした理由の一つではある。

不意に肩を叩かれた。警戒して素早く振り向けば兄の友人である西園道留が笑つてゐる。

「道留くん」圭は安心したように笑つた。圭はその容姿から男に声をかけられることがしばしばある。その手の輩でなく、自分が信用している人物であつたのでほつとしたのだ。道留もその手の輩の一員であるという噂を彼女は耳にしてはいたがそれを信じてはいなかつた。

「おつかい？」圭の手のビニール袋を見て道留が言つた。

「うん。道留くんは？」

「親と会つてきたんだ。それ何が入つてるの？」道留は答えを聞く前にビニール袋を圭の手からとつて中を覗き込んだ。結構たくさん買ったね、と笑い、袋はそのまま彼が運んで行く。

何が入つてるかなんてどうでもよく、ただ荷物を代わりに持つための口実だつたことを知り、圭は嬉しくなつた。

これが兄や友人であつたら遠慮をして拒むところだが、圭はただ礼を言うだけだつ

た。圭が道留を認識したのはまだ半年前。ある日突然兄の友人だという男が食卓に居て、そのまま兄と父を含む四人で兄の作った料理を食べた。

見栄っ張りな兄が友人を家に呼ぶなんてことがなかったので、その日のことはよく覚えていて。よく笑い、よく食べて、すぐに父親と仲良くなっていた。そのときはまだ圭にとっての道留は兄の友人でしかなく、言ってしまうえば、彼の容姿やアクセサリの好みからしてあまり好きなタイプではなかった。

しかし彼がよく家に来るようになり話す頻度も増えるにつれていく。次第に彼の見た目と内側のちぐはぐさに気づき、兄がこの男を友達に選んだ理由もなんとなくわかってきた。それはきつと兄と真反対だからなのだ。凝り性の兄とは異なり、西園道留はこだわることを嫌っているように観察された。

お互いに違う性質を、それも手に入らない性質を持っているから彼らは友人なのだろう。そう思い始めると、がぜん興味が湧いてくる。彼の人懐っこさもあつて気がつけば自分の友人にもなつていた。

いつしか兄が彼の家に行くようになり、そのうちに圭も彼の家でひと月に一度くらい食事に誘われるようになった。初めて彼の家を訪ねたとき、圭は目を丸くした。高層マンションの最上階に一人暮らしをしていたからだ。今まで何となく、お金持ちなのだろうと思っていたが、そのときになつてやつと確信できた。兄妹が気を使わなくて済むよ

うになのか、圭には確かなことはわからないのだが、彼の家で食べるのは決まって宅配ピザだ。

栄養バランスがおかしいと道留の食生活に異議を申し立てた兄が何品か足すのが普段の流れである。そんな生活を繰り返すうちに、圭は道留をよく信頼するようになった。もう一人の兄のように、と言うと語弊があるが、少なくとも自分をよくわかってくれている存在であること、自分を尊重してくれていることは確かだった。それは兄の白銀御幸やほかの友人たちとはまた違うベクトルのものだ。

二人は酔った街を話しながら歩いた。人通りが少ない路地に入る。今は二人とも制服だが、例えばどちらも私服だったら、たまにすれ違う大人たちをエキストラにして、何かの撮影に見えただろう。二人の容姿はそれほどまでに整っていた。話の内容は学生らしいものや、白銀御幸のもの、共通の友人である藤原千花のものなど。彼から聞く自分と親しい人の話は新鮮だ。人の性格の捉え方が違うのだろう。特徴を掴むのも面白い。

話の最中に道留のスマホが着信を告げた。彼が圭の顔をちらと見たので圭はうなずく。それを確認した道留は電話に出た。電話の中身は聞こえないのだが、圭は自分は聞き耳を立てていないんだと示したくて、彼から少し離れて歩く。それでも電話の向こうの声が女であることは分かった。彼女だろうかと思う。彼の容姿からしていない方が

不自然なのかもしれない。少し不愉快になる自分に気づくとそれでまた不愉快になる。

二人の進行方向から一人の男が歩いてきた。三十歳くらいだろうか。かなりアルコールを摂取したらしい。顔は赤く、歩き方も危なっかしかつた。

あまり見ては何か言われるかもしれない。そう思った圭はうつむいて歩いた。視界の上の方に男の足が見えて、それが横へと移動していく。もうすれ違うだろう。そう思った矢先心臓が飛び出るかと思った。肩を掴まれたのだ。

「ねえ！飲み行こうよ！」男が大声で言った。距離と声量のバランスと、圭とその隣の高校生が知り合いであることがわからないらしい。

圭は振りほどいた。道留が何とかしてくるだろうと思っていたのでさほど焦りはなかった。

「ねえいいじゃん！奢るしさあ、らいじようぶだよお、変なこともしないしい」呂律が回っていないが、男は簡単には引き下がらなかつた。男の手が圭の体に向かって伸びる。

しかし直後鈍い音がして、男は鼻頭を抑えて蹲った。圭は道留が男の顔を殴ったことを一瞬遅れて理解した。続けて道留は蹴りやすい位置に来た男の腹部を蹴り上げた。それにあわせて男が苦しそうに呻く。道留がもう一度蹴ろうと足を動かしたところ、圭は我に返って止めに入れた。

「やりすぎだよ！」彼の手を引いて非難する。

「大丈夫でしょこのくらい」道留はいつも通りに笑った。

「何がですか」

「大ごとにはならない。TPOは守ってる」道留はいいながら圭の手首をつかんだ。そして走り出す。

圭はわけがわからなくてされるがままについて行った。彼が走るのをやめると、圭は道留に詰め寄る。

「暴力じゃなくても解決できましたよね？どこにああする必要があるんですか？」

「必要はあっただろ」道留は家の壁にクレヨンで絵をかいたのを怒られた子供のような顔をして言った。

「圭ちゃんに触ろうとしたんだから」

自分が特別扱いされてうれしい気持ちと、彼は絶対に間違っているという憤りに似た悲し気持ちちが混ざった。うれしい気持ちだけを必死に排除する。

「それでも、殴ることはないでしょ!？」語気が荒くなる。

道留は圭の目を見て、少しして、それからあっさり謝った。

「そんな気持ちにさせるつもりじゃなかったんだ。ほんとにごめん。もう、しないよ」

道留の顔は本当に後悔しているようだったが、実のところとってつけた反省の顔であ

る。それが圭にはわからなかった。だからその仮面は圭を騙すことには有用だった。圭は一応彼を許した。二人でまた歩き出したが、道留が圭を家に送り届けるまで会話はなかった。玄関のところでビニール袋を受け取りあいさつをして別れる。

圭が家のドアを開けると兄の作った料理はすでにテーブルの上に並んでいた。しかしどうにも食べる気がわかかなかったので、先に風呂に入ると兄に告げ、着替えを取ってバスルームへと向かう。服を脱いでいる最中、スマホが鳴った。道留からのメッセージが届いたのだ。確認すると二言三言の謝罪だった。圭は少し考えて、「気にしていいから気にしないで」と送った。そして温かい浴槽に入ると、自分の甘さに深いため息をつくのだった。

とある休日の夕方。道留は真方葵として渋谷の街を歩いていた。モデルのようなスタイルの良さと、アイドルのような顔立ちを兼ね備えているので、女性だけでなく男性までもが横目で見ている。

外出の目的はショッピングでも、食事でもない。女漁りだ。顔がそこそこよかったら、もうそれでいい。普段、こういう事は他校の友人たちと共にやる。その方が成功率が高いのだ。今日一人で来たのには、二つの理由がある。いつものナンパ仲間と連絡が取れなかったからというのが一つ。あまり群れたがらないタイプの、身持ちの固そうな、清楚系を狙うためというのが一つだ。渋谷を歩く、若い女は大概が友人たちと歩いている。一人で歩いていて、かつ、及第点に達している女性は今のところ見当たらない。(カフェを覗きに行こうか)

カフェ実際、穴場である。声をかけるまでが面倒くさいが、このまま街をぶらつくよりは効率が良いだろう。道留は近くのカフェを調べようとスマホのロックを解除する。「ねえねえ」

急に声をかけられた。声にしたほうに顔を向けると髪をダークグリーンに染めた女

が笑っていた。くつきりとした二重まぶたの下から人懐っこそうな茶色の瞳が覗く。全体的に薄化粧ではあるが、ただ一箇所、口紅は真つ赤だ。鼻も高く、顔つきは北欧の少女のようにも見える。年はそう離れてはいなさそう。そしてひたすらに美人である。そうそうお目にかかることができなレベルの顔立ち。美人になれている道留にも、彼女はひととき強い印象を与えた。

「なに？」 道留はにこやかに応じる。可愛らしい子に話しかけられて、機嫌がよい。

「一人？」

「これ逆ナン？」

「もう！言わないでよ」 女はわざとらしく拗ねて見せた。

そのわざとらしい表情を見て、地雷女かもしれないと道留は一瞬考えたが、顔が良すぎるので、些細な問題だと判断した。時刻は五時半。カラオケに行つて夕飯をとる。運が良ければホテルにも行ける。

「ごめんごめん」 道留は言いながらスマホを操作し、カラオケの場所を調べた。「カラオケ、行こうか」

「行こー！」 女はすぐに笑顔に戻った。「ねえ、なんて呼べばいい？」

「葵」

「アオイ？ 女の子みたいな名前だね」



「よく言われるよ、それ」

「あたしは紗綾って呼んで」

「ちなみに苗字は？」

「赤井」

道留は彼女の名前を平仮名にした。『あかい さあや』が『はやさかあい』になるには『は』が足りない。何を警戒しているんだ、と道留は自分が可笑しかった。

○

早坂愛は安堵していた。まだそうするには早いと分かっていたが、西園道留をうまく騙せたとなると、ついホツとしてしまう。隣にいる女が早坂であるという可能性を一切考慮していないようにも思える。

早坂の目的は西園道留が真方葵として話す身の上の話だ。両親と妹を飛行機事故で亡くし、自分だけ生き残った。真方葵はこの悲劇的な話を行きずりの女の子に打ち明け、同情を誘い、口説く。これが作り話なのか、実話なのか。早坂はこれを見極めたかった。

二人でこの部屋に入って、もうすぐ一時間が経つ。出なければいけないまで、あ

と三十分ほどあった。彼はいま、流行りの曲を熱唱していた。歌がとても上手いことにも今更驚かない。彼が自分の主人に並ぶ程に高スペックなのは、短い付き合いの中で、充分すぎるほど思い知っていたのだ。

道留が歌い終わる。早坂は適当なやり方で歌唱力を褒めると、彼に体を寄せた。肩を当てて、少しもたれかかる。シナモンのような甘い香水の香りがした。キスもそれ以上のことも勿論させるつもりは無い。ただ、性的でないボディタッチくらいは今日は許す。それは早坂にとっては前代未聞の心境であった。

なぜ自分はそれほどに、この男に好奇心を抱いているのか。彼女は幾度となくこの命題と向き合ってきたが、現在は、好奇心は好奇心だと割り切っている。つまり彼女は、知らないでいるという選択を取れるほどには賢いのだ。

「どうした？」道留が早坂のフィジカルな接触到に声だけで反応した。タッチパネルを手に取り、操作する。「紗綾ちゃん曲入れてないじゃん」

早坂は見積もっていた彼からの親愛度を彼の薄い反応を見て修正した。思っていたより、やりにくい。女好きというから、もっとあっさりとして、飛行機事故の話をしてくると思っていたのに。

「お腹減った」出来るだけ可愛らしく、彼の心を引きつけるように、それでいて、わざとらしくすぎないように言った。

「ピザ食べるか。美味しいところ知ってるんだけど」

「行く行く！」ピザが好きでほとんど毎日食べているという情報は掴んでいたが、今日も食べるのか、と思う。

二人は部屋を出た。会計は道留が手早く済ませた。

ピザ屋までは十分くらいだと道留が告げた。会話は弾む。当然である。道留の趣味をあらかじめリサーチしておいたので、早坂は適当に合わせていったのだ。コンピュータ関連は道留も早坂も本当に好きな分野だったので特に盛り上がる。道留はバーチャルリアリティに関する知識が豊富で、話もわかりやすい。例えばうまかった。

「でも意外だな。綾ちゃんがコンピュータ好きだなんて」

「よく言われる」早坂は笑った。「でも、面白いじゃん？頭が拡張される感じがする」

道留が遠目に見える看板を指して「あの辺り」だと言った。あと三分程だと早坂は見積もる。そして思い切って、彼と手を繋いだ。指を絡ませる。思いのほか低かった好感度に対する修正打だ。彼は早坂の顔を見ると一瞬だけ驚いた顔をして、そのまま歩いていく。やはり慣れているようだ。

早坂は自分を制御せねばならない。外側の自分が作ったキャラクターを最も効果的に操るためには、中心の自我は常に冷静でなければならない。それが出来ないならば、四宮かぐやのヴァレットは務まらないだろう。

しかし、早坂にとつて、同年代の男性とこうして手を繋ぐのは初めての体験だ。加えて、相手はアイドルグループにいてもおかしくないほど整った容姿の持ち主。少し照れくさいのも、心拍数が上がるのも仕方の無いことだ。だが、彼女はこれを抑えることが出来る。四宮の英才教育の賜物である。早坂は自分のメンタルをコントロールしようと試み、そしてあつけなく失敗。破綻した。

その瞬間、早坂は急に恥ずかしくなった。

西園道留と手を繋いで街を歩いているという事実。それは、自らの意思で辿り着いた状況であり、それゆえにますます恥ずかしくなる。そして早坂は、大胆にも恋人繋ぎを、指を絡ませる方の繋ぎ方をしてしまっていた。さらに手のひらを通じて彼の体温が感じられることに気づくと、もうダメだった。顔が熱くなるのがわかる。

手を繋ぐだけが初めてではない。デートも初めてだ。歳の近い男性とカラオケに行き、夕食を食べる一連の流れは、軽いデートである。計画を練っている最中の早坂は、これが自分の初デートになることをもちろん認識していた。しかしそれは軽い認識だった。二人で手を繋いで街を歩くということが、どれだけ心拍数上昇に作用するのかを甘く見ていた。要は、思っていたよりドキドキしていてヤバイのである。

人目も気になる。周りからは当然、カッパルだと認識されている。それは自分の計画の内での事象なのに、猛烈に恥ずかしい。しかもその恥ずかしさは、決して嫌なもの

はないことに気付いてしまった。どこか心地良さを感じてしまっている。

恥ずかしくて、前を見て歩けない。俯いて歩く。しかしこの人混みの中、俯いて、前を見ずに歩いているのは、隣で自分の右手を握る西園道留のおかげである。この、『おかげ』という所もまた恥ずかしく、癪でもあった。

体温が上がっていくのが自覚できた。手のひらにも汗が滲んでいる気がして落ち着かない。なぜ落ち着かないのか。それは彼に良い印象を持って貰わないと、情報が引き出せないからだ。しかし早坂はそれがおそらく、自分の言い訳であることに気付いてしまった。では本当の理由は？ 答えはあっさり見つかる。このままでは危ないことにもすぐに気付いた。状況を打破しないと取り返しのつかないことになる。

取り返しがつかなくなってもいいんじゃない？

早坂は脳内にポップアップしてきた提案を全力で無視する。

早坂は切り替えようと試みる。問題が山積みなだけで一つ一つはきつと大したことがない。まずはこの手を離してもらおう。そうすれば精神状態はずつと良くなる。

早坂は絡めていた指を解いて、右手をゆつくり引き抜いた。手を離してもらうことに成功。手を繋ぐのを辞めた理由を与えるために、右手でバッグをまさぐって250mlのペットボトルを取り出し、一口飲む。そして右手を定位置に戻したところで、自分を制御しようと呼吸をゆつくりにした。

しかしここで大誤算。道留の左手が早坂の右手を捕まえたのだ。先程と同じ、恋人繋ぎが形成されていく。拒もうか、と早坂は思ったが不自然すぎる行動なので断念。されるがまだまだ。このままでは深刻な事態に陥る。そう思った早坂は計画の断念を検討し始める。

「大丈夫？耳、真っ赤だよ？」道留の声がした。

「あ、うん。平気〜」道留の顔を見ずに言う。

「さつきから口数も少ないし」

「え、そんなことないよ〜」言いながら、ここまで恥ずかしい思いをしているのに収穫がゼロなのは割に合わないと考え、計画の続行を決意。

「もしかして、今更照れてる？」

道留への返答に、一瞬迷ったが、彼女の中に僅かに残った冷静さが、計画成功に有効な返答をたたき出す。小さな声で、か弱く、答える。

「……………うん」

実は男性経験少ないんだよアピール！

可愛くてなおかつ軽そうな女が、実はガードが固く男に慣れていないというギャップ。そのウブな仕草。そんな子が自分を選び、心を許してくれたという事実。破壊力は、凄まじい。

「手離そうか？」道留は優しく提案した。

早坂は黙ったまま大きく横に首を振った。あざとい。

「紗綾ちゃんって、思ってたよりいい子だね」

「どういうこと？」

「もつと軽い子だと思ってた。脳みそも男女関係も」

「よく勘違いされちゃう」

「なんで俺に声掛けたの？」

「それは、えつと……」彼女は考える仕草をした。「なんか……いいなって……」

「何それ」道留は笑った。

会心の一撃を続けざまに叩き込んだことにより、早坂のメンタルは自信と、安定を取り戻して行つた。

○

店内はそれほど広くなかった。二人が客席に座るとそれで満員となった。レンガ造りの建物を摸した内装で、客席から窺が見えるようになっていた。早坂はメニューを開くがどれが美味しいのかわからず、何度かこの店に来たことのある道留に自分の分も任

せることにした。

「運良かったね」手を拭きながら道留が言った。どういふことかと早坂が尋ねると彼は入口の方を示す。「俺らが入ったあとから並びだしたみたい」

早坂が見ると三組の客が空席を待っていた。

「有名なの？（んん）」

「何度かテレビ出てるよ、ほら」今度は壁を指さす。そこには芸能人のサインが並んでいた。

白い服に身を包んだ、三十歳くらいの男の店員が二人の席までやってきた。

「どうも、お久しぶりです。今日は御来店ありがとうございます」その男は道留に挨拶をした。

「いえいえ。すみませんね、わざわざご挨拶させてしまつて」道留は立ち上がつてそれに応じた。「お変わりなさそうで良かったです」

「お氣にかけてくださり、ありがとうございます」男は早坂の方を見た。「こちらの方は、彼女さんでいらつしやいますか？」

「やめてくださいよ」道留は笑つて男の肩を軽く叩いた。「恥ずかしいな」

「申し訳ございません」男も笑う。「それで今日はどうしましょう。いつも通り、私のチヨイスで構いませんか？」



「ええ。お願いします」道留は軽く頭を下げる。

「何枚にしましょう?」

「二枚で」

「了解しました。しばし、お待ちください」男はメニューと共に厨房へと帰っていった。

「今のは?」早坂が聞く。

「店長さん。親父の知り合いとここに来た時に紹介してもらったんだ」

「えー!すごーい!」目を輝かせて言う。「お父さん、何者なの?」

「なんだと思う?」

道留がはぐらかそうとしていることを早坂は感じ取った。

「えー、でも、結構な大物ってことでしょ?」

「大物だった、が正解だな」

「どういうこと?」

この問いは心からのものだった。早坂は道留の父親が、四宮グループ傘下の携帯通信会社の社長であることを知っていた。もちろん現在進行形で、彼の父親は社長である。だから「大物だった」なんて、過去形に言い換えられないはずだ。

「ご飯のあとで教えたげる」道留は答えた。

やがてピザが運ばれてきた。一枚目はクアトロフォルマッジ。四種のチーズがふん

だんに使用されている。二枚目はロマーナ。トマトソースのピザだ。早坂はどちらのピザにも七十点をつけた。彼女は勤務先の関係上、もつと美味しいピザを食べているし、やたらと舌が肥えている。故に七十点。及第点ではあった。

食べ終えて、店を出る。代金は全て道留が支払った。時刻は二十時を過ぎていた。街には夜が腰を下ろしているが、眠りにつくには灯りがうるさい。

二人は並んで歩いた。どちらが言い出したわけでもなく、駅へと向かっている。手は繋がらない。食事中はよくしゃべった道留は、今は黙ったままだ。

「それで、さっきの話なんだけど」道留が切り出す。「これさ、他人に言うのはじめてなんだ」

「うん」これは嘘だ、と思いつながら頷く。

「八年前、まだ八歳のときだ。飛行機に乗ってた」道留の声は静かで、低く響く。「ドイツ、ベルリンに行った帰りだった。家族四人で。向こうのことはよく覚えてないけど、日本とは色使いが全く違ったのは記憶に残ってる。原色を大胆に使うんだ、あつちは。そう、それでその帰りだ。上空でエンジントラブルが起きて、中国地方の山に墜落した」道留は淡々と告げた。

早坂が調べた飛行機事故の中には、確かに八年前、山口県で起こったものがある。しかし今の段階で、彼のこの話が嘘か本当かを判断はしなかった。ここで判断を下すのは

短絡的である。

「怖かったよ、すごく」道留は続ける。「ああいうのってなんで記憶に残るんだろうね。警告音と怒声と泣き声。酸素マスクのにおい。落ち着いてくださいって言ってた添乗員が一番焦ってたこと。隣に座ってた父さんが手を握ってくれてた。みるみる高度が下がっていくのが分かった。父さんは、墜ちる少し前にベルト外して俺の上に優しく覆いかぶさった」彼は言葉を切った。空を見上げている。

早坂は彼の横顔をちらりと見ると、黙って彼の言葉を待った。これが演技だとしたら大したものだ、と自分のことを棚上げにした。

「おかげで俺は助かった。奇跡的に傷も、腕とか、外から見えるところにあるやつは、全部消えた。けど、父さんも、母さんも、妹も、全員ダメだった。まだ五歳だったんだぜ？」彼はそう言っただけで悲しげに笑うとスマホを操作して一枚の写真を早坂に見せた。「ほら、可愛いでしょ」

小さい頃の道留の隣で、可愛らしい少女がこっちを見て笑っている。目元が、道留によく似ている。

早坂は、彼の飛行機事故の話が、もちろんフェイクは混ぜてあるだろうが、大筋は本当であることを悟った。

「うん、すごくかわいい」自分の口から出た言葉は、驚くほど無機質だった。氷柱のような冷たさを伴っている。

今はまだ駄目だ。自分を抑えて、頭の悪い女、赤井紗綾を演じなくてはならない。今の自分の口調に彼も違和感を持ったはずだ。早く修正しなくてはならない。早坂は必死に自分に言い聞かせた。しかし口の端はきつく結ばれているし、目の奥はどういうわけか熱い。泣きそうだ。もう無理。

「嘘ならどんなにいいかって、そう思っていました」早坂はもう演じるのをやめた。もう、一刻でも早く屋敷に帰って眠りたかった。「死んだ家族を餌に女性をひっかけるなんてどういう神経してるんですか？ 罪悪感、ないんですか？ 家族の死をそんなことに利用するなんて、頭おかしいんじゃないですか？」

早坂は道留の顔を見られなかった。自分が心の奥から憤っているのがわかる。今日、この男にときめいていた自分も許せない。

「……早坂？」道留が掠れた声で尋ねた。早坂は答えなかった。その反応に彼はため息をつく。「やられた、マジで」

彼が話すだけで虫唾が走る。道留が立ち止まったので、早坂もそうした。名前を呼ばれて、仕方なく顔を上げ道留の顔を睨みつける。彼は困ったような顔をしていた。ぼつが悪いのだろう。良い言い訳が見つからないのかもしれない。とにかく、何を言おうか

考えているのは間違いない。そのはずだった。

「嫌いになった？」道留は笑った。いつも通りに。

早坂は思い切り道留の頬を手の平で思い切りはたいた。そして速足で駅へと向かう。振り向かなかつた。道留が追ってくる気配はなかつた。駅について、そこで一回だけ後ろを見る。当然彼の姿はない。もうきつと、彼と話すことはないだろうなと思つた。しかしそれでいい。彼女は、彼の性根が腐りきつていたことが残念だった。彼との縁を切るのは、少し抵抗がまだあつたが、どうせすぐにどうでもよくなるだろうと割り切つた。

西園道留が早坂愛とピザを食べたのは土曜日のことだった。したがって翌日は日曜日。その日、道留は午前中を寝て過ごした。お昼ごろに尿意で起きる。熱くて濃いコーヒーを飲んで頭を立ち上がらせた。彼は味にあまりこだわりのないので安物のインスタントだ。おいしくはないがまずくもないのでこればかり飲んでいる。食欲はあまりなかったのだが、何日か前に宅配されたピザの残りを食べた。

道留は一人暮らした。七階建ての高級マンションの七階に住んでいる。七階へはエレベーターのカードスキヤナにカードを通さないと止まらない。つまり最上階は道留のためだけの空間だった。3LDKだが、基本的にリビングで生活しているので他の部屋には埃がたまっている。三か月に一回業者を呼んで掃除してもらっていた。

このマンションは父親の資産だったが、いまは道留のものになっている。ほかの部屋は他人に貸し与えているので、それだけでもかなりの収入になる。

ソファアーにどっぷりと座って煙草を吸う。不健康極まりない生活だが、健康を気にしてばかりいる人間よりはマシだ。健康ではないが健康的であることは間違いない。

早坂との縁が切れかけている。首無しニツクみたい皮一枚でどうにかつながつて

いる。そう例えてはみたもののニックは死んでいるので例えとしては不適當だと思つた。彼はハリーポッターが好きなのでニックを使ってみたかったのである。ハリーポッターの全巻を読破したとき、母がとてもよく褒めてくれたことを覚えてゐる。死んでしまつて残念だ、と思う。彼が残念だと心から思うことは珍しい。

縁を切つてしまつても、何も問題はない。彼はいくつかのシュミレーションを行つてからそう結論付けた。早坂愛はショートケーキに乗つてるミントの葉みたいに、ほとんど取るに足らない存在だ。無くては寂しい、という程度の存在。つまり装飾。本質ではない。

困つたな、と思う。頭ではそう理解しているが居た方が面白いだろう、とあまり合理的ではない危険な思考を行っている自分がいて、どちらかというとな彼のほうが優勢らしい。ミステリとしては必要だが、犯人からしてみると、探偵は必須の存在ではない。本質は殺人であつて探偵はエンターテインメント性を付与するための存在だ。

しかし晴れ舞台を誰か、理解してくれる人間に見てほしいという欲求は、あらゆる行動の動機の一部であることはどうやら確かであり、犯人にとつての探偵の存在価値を否定してしまうことは短絡的に思える。

実際のところ早坂愛を切り捨てたところで探偵は山ほどいる。というか、本職の刑事が大人数動員されることになる。その中には早坂よりも高度な頭脳を持つ人物も、たぶ

んいる。それでも早坂愛にこだわるのは、やはり自分の作る物語に最も適当な探偵となり得る人間だからだろう。西園道留に対して持っている興味。それが彼女の価値。

「まあ、俺は多少修復した方がいいと思う。お互いのためだね」

道留が独り呟くと、頭の中は静かになった。議決したのだ。普通、人間は、何人もの人格が液体のように溶けて混ざり合って一つの人格を作り上げている。道留はそれをもっと流動性がない、粘性のあるような形で混ざり合っていて、物事について深く考えたいときに個別の人格がそれぞれ形を成すのである。

さて、どうしたものかと道留は考える。必要だったら彼女のところへフオローをしに行かなくてはならない。あまりに関係が悪化したら、探偵役を買って出てもええなくなる。それは望ましくない。しかし、もし買って出てもええなくとも、大勢には影響がない。だから、失敗しようとも別に構わない。でもわざわざ彼女に対して「ある程度のことをしてやろう」と気にかけている。自分はこんなにバカだったろうか、と思った。

○

早坂愛は憂鬱な気分に通学路を歩いていた。西園道留の顔を見るのが嫌だった。それはどちらかといえば、どういう顔をすればいいかわからないから見ない方が楽であ



る、といった気持ちであつて、明確な嫌悪のような強いエネルギーを持つてはいない。彼は一切話しかけてこないかもしれない。あるいは何事もなかつたように話しかけてくるかもしれないし、もしかしたら謝つてくるかもしれない。それらすべての可能性が、早坂にとつてはどうもむずがゆく、腑に落ちないのだ。

いいじゃないか、話しかけてこないなら。自分は彼が嫌いなのだからもう縁が切れてもいいんだ。

そう思つてはいるのだが、どういうわけか気が重い。自分がどうしたいのかも、どうしてほしいのかもよくわからない。昨日は近侍としての仕事に没頭することで考えることをやめられていたが、いまはただ歩きなれた通学路を機械的になぞるだけである。どうしても、考えずにはいられなかつた。

学校につくと校門の前で友達であるアヤネと合流した。彼女と話していると気がまぎれたので助かつた。暗いどんよりとした感情をうまく隠せるほどには、気持ちが安定している。

教室に二人で入る。教室の中央で男子がいつも通り固まつて話している。彼の声もそこから聞こえてきた。彼の表情にいつもと違う点を見つけたくて、早坂は彼の方に目をやる。彼はいつもと何も変わらない笑顔を浮かべていた。

やはり何も気にしていないのか。いや、気にしていたとしてもあの男子生徒たちにそ

れが悟られるようなそぶりを、彼は見せないか。そう思った矢先、彼の目線と自分のそれと交差した。早坂は一瞬緊張する。瞬きでごまかして視線をずらした。彼の笑い声が聞こえる。別に離脱していたわけではないのだが、会話に戻つたらしい。その笑い声が、早坂にとつては不快だった。

授業が始まる。現代文だ。先週からカミュの異邦人が題材になつている。有名な作品だし、この学園のことだから、この本を読んだことのない生徒などいないだろうに、それでも教師はこれを扱っている。たぶん、教える側の趣味なのだ。

もちろん早坂もこれを読んだことがあつたので退屈な授業だった。黒板に書かれた文字を写すという、ただの作業をする。何の意味もない作業だ。無駄に資源を使う分、より悪い。ぼんやりと授業をただ聞いているだけの方がいくらかましに思えた。しかしノートをとることが成績をつけるうえで判断材料となる以上、生徒たちは必死に手を動かす。授業とは別のことを考えていない生徒が、果たしてこの教室にいるのだろうか、と早坂は思う。教師から指名されることもないので、自分の世界に没頭していてもリスクはゼロだ。

以前から道留とは、学校で話すような仲ではなかった。人付き合いの良い、ギャルの早坂愛とチャラチャラした女たらしの西園道留はただのクラスメイトだ。遊びに誘われることは当然ないし、話しかけられることだって珍しかった。早坂自身その関係を気

にしていなかった。話しかけられないのが普通で、むしろ、話しかけられたときは少し身構えてしまった。

それがどういうわけか、今自分は彼が声をかけてくれるのを期待しているようだった。理解できない感情だ。理屈ではないのだろう。無理やり論理を用いて説明しようとすればできるだろうが、敬遠された。

自分はこんなに弱い人間だったのだろうか。メリーゴーラウンドみたいに思考が循環している。見える景色は変わらない。あの日からずっとそうだ。時間が解決するだろうけれど、そのめどが立たない。状況を解決には時間がある。

彼を嫌いに、完全に嫌いになれたらどんなに楽だろうか。ずっとそればかり考えている。けれど……。

彼女は思考を放棄したかった。都合の良いことに目の前にはつまらない文章が並んでいる。早坂は縋りつくようにそれに没頭した。

○

二人が仲たがいで、六日が過ぎた。その間、特に何もなかった。早坂は何か行動を起こそうかと色々と考えたのだが、結局できずじまいだった。かつて道留から週に二度

はかかってきた電話は、いまや全くかかってこず、LINEも途絶えた。それをちゃんと認識しているあたり、彼を慕っていたのだらうと思う。そのことに気づくと、もつとやりきれない気分になるのだった。

六日間、彼女はずっと答えのない問題について考えていた。無論、考えたくてそうしていたわけではない。彼女は疲弊していた。そもそも四宮家に仕えること自体が激務であり、疲れの原因なのだが、道留との人間関係がさらに重荷になっている。

今日は金曜日。もう今日の生徒会活動は終わり、早坂は主人と共に黒塗りの高級車の後部座席に乗り込む。

「今日の来客はありません。先月のパーティでかぐや様と二言三言言葉を交わした、出版社の社長の奥様から些末な内容の手紙が届いていました。改めてご挨拶を申し上げます、とのことです。返信内容の草案はこちらになります」早坂はスマホの画面を見せました。かぐやのところにはこうしたご機嫌伺いの手紙がよく届く。

「ああ、あの派手好きな方ですか」かぐやは目を走らせて、このままでいいわと告げる。「この方は媚びを売るのが好きなのかしら。ご苦労なものね」

「媚びることしか能がないのでしょうか」

「それもそうね」かぐやはにこりともせずと言った。

かぐやはこの後、御琴の稽古がある。抱えている多くの習い事の一つだ。来客がある

日はかぐやも早坂も非常に忙しい夜となるが幸運なことに今日はそれが無い。早坂は過度に気を回して食事のセッティングに口を出す必要もないのだ。

「早坂」かぐやが早坂の顔を見て言う。

「なんででしょう」

「あなた最近、どうしたの？」

「何が、でしょう」心当たりはあったが、ポーカーフェイスを張り付けて対応する。

「元氣、無いように見えるのだけれど」

「いつものことです」

「そう。いつも通りならいいわ」

会話は終了した。早坂はとぼけて見せていたが実のところは、もっと、根掘り葉掘り追及してきてほしかった。もちろん心の中でその気持ちを明確に言語化していたわけではない。しかし、残念だと思う気持ちも、もやもやとしたものが生じて、残る。思えば、自分の悩みを他人に打ち明けたことはなかったかもしれない。自分の受け答えを少し後悔する。

「言ったかしら。私、表情からその人の抱えている感情をある程度察知できるの」かぐやが言った。早坂はかぐやの顔を見る。すぐに目が合った。かぐやはずっと早坂の顔を見ていたらしい。かぐやの眼が優しく笑った。「後悔が期待に変わったかしら？」

ああ、そういえば、この人は天才だったなと早坂は思う。そして嬉しかった。主人に相談するのは立場上一問題があるかもしれない。しかし同時に、かぐやは友達なのだ。それなら何の問題もない。

「ここでは都合が悪いので、夕食後にかぐや様の部屋にお邪魔しても?」  
「もちろん」かぐやはかすかにほほ笑んだ。

○

「それで?西園君がどうしたの?」かぐやは早坂が部屋に入ってくるなり聞いた。

早坂の心臓が一拍だけ極端に大きく音を鳴らした。どうやらもうほとんどお見通しらしい。

かぐやはベッドに腰かけていた。隣に空いたスペースを二回軽くたたいて早坂に示す。早坂はそれに従ってかぐやの隣に座った。

「喧嘩しました」事の経緯をどう説明してよいかわからなかったもので、とりあえず、いまの状況だけを簡素に伝える。「一週間、連絡が来ません」

膝の上で組んだ手に視線をじつと見つめる。こういう話をするとき、どんな表情をしていけばよいかわからない。

「好きなの？」かぐやが問うた。

またしても早坂の心臓が跳ねる。

「どうしてそうなるんですか」心なしが、強い口調になった。

「だって、殿方から連絡が来ずに一週間も悩んでいるのよ？仕事の連絡を待っているわけでもないし、他の可能性を考える方が不自然だわ」

「ごもつともである。早坂だって、自分の気持ちが一体どうなっているのか、あらかたの目星はついていてた。だが認めたくない。」

「好意なんて、抱いてません。彼になんか」できるだけ不機嫌さを表に出して、そう言った。「どうしてあんなクズに……」

「そうね、ごめんなさい」かぐやはすぐに引き下がる。「でも、嫌いでもないんでしょう？」

早坂は、言葉に詰まった。その一瞬が、肯定を意味することを数秒遅れて理解し、軽く唇を囁む。かぐやの言葉を待つが、かぐやは何も言わない。自分に言わせようとしているのだと、早坂は察した。

「彼は、わたしに似ていると思ってました」早坂はできるだけ手短かに言った。かぐやの頭脳ならば、それをきっかけに彼に興味を持ったことも、彼が素晴らしい人間であると期待していたこともすぐに理解できるだろうから。

「そう。裏切られたのね」

勝手に、と早坂は付け加えた。彼はただ彼らしくあつただけだ。「もう、よくわからないんです。彼に対する感情にどう名前を付ければいいのか」

「名前を？本当はもうわかっているのでしょうか？」かぐやが言う。先ほどから痛いところを突いてくる。「認めたくないだけよ。さあ、好きか嫌いかの二つ。でも嫌いではない」

「三つめがあります。そのどちらでもない、が三つめです」

「いいえ。その択を今のあなたは取れない。自分でもわかっているはずよ？そんな心の余裕はないって。だから、二択」

自分の心が疲弊し切っているのは分かっていた。早く認めてしまった方がいいことも。しかし、怖かった。怖くて仕方なかった。初めての感情なのだから、どう処理していいかわからない。相手も問題だった。どうしていいかわからない。

早坂は、その気持ちをかぐやに伝えた。

「もし許されるなら、嫌いになりたい？」かぐやが尋ねた。

「ややあつて、早坂はうなづく。」

「その方が楽なものね？」

「……………はい」

「正直、彼を嫌いになるための理由はたくさんあるし、デメリットはない。どうして、



嫌ってしまわないの？」

「そんなの、私が知りたいですよ」

しばらく、二人の間に沈黙が流れた。互いに信頼しあっていないと耐えられない雰囲気だった。

「ねえ早坂」やがて、ゆつくりとかぐやが言う。「そんなに悩んでいる時点で……」

「わかってます。わかってますけど……」

「踏み出せば傷つくことは目に見えているわ。けどね、早坂。あなた、いつまでそこにいるつもりなの？」

早坂は目を瞑った。どういうわけか、目の奥が熱い。そつとかぐやにもたれる。やつと用意が整った。かぐやの誘導が無ければ、きつとここまでは来られなかっただろう。妙な安心感がある。こわばっていたものが緩む。これでいいのかもしれない、いや、きつとそうだ。そう思う。

「やめてくださいよ、かぐや様。必死に覆い隠していたんですから、引きずり出さないうでくださいよ」早坂は諦めたように言った。「どうして、こじれちゃったのかなあ」

「彼が異常だったからでしょうね」かぐやは早坂の頭を撫でた。「普通の人を好きになつていたら、こう苦労はしなかったでしょうに」

好き、の二文字が頭に沈んでいった。帰り道に握った彼の手を思い出す。感触を、暖

かさを。

涙がこぼれてきた。自分がこうしている間にも、彼は自分の知らない女と体を重ねているかもしれない。そう思うと、切なく、やりきれず、吐き気がした。彼女が自分の気持ちを認められなくなかった理由の一つが、このように傷つくからだだった。

「ちよつと、何泣いてるの」かぐやは驚いて、それから柔らかなく微笑み、早坂の頭を抱き寄せる。

「一週間連絡来ないんですけど」早坂が涙交じりに言う。彼と電話で話すのは、楽しかった。

「だって、頬を叩いたのでしょ？」

「そんなこと、気にしますかね。彼」

「男性は案外繊細だと聞いたことがあります」

「西園道留がですか？」

「まあ、そうね」

「てかなんで私がビンタしたこと知ってるんですか？」

「尋問したの」

「彼を？」早坂はかぐやの腕の中から頭だけ起こした。「どういうことです？」

「あなた、土曜日泣いて帰ってきたでしょう？ たぶん西園君の身辺調査の帰りだなと

思つて。彼があなたに何かやらかしたんじゃないかと」

早坂は主人の行動力に呆然としていた。自分のことを心配してくれていたのを嬉しくも思う。

「……何か、言つてました？」

「口説こうと思つたらまさかの早坂でビビつた、つて言つてましたね。ピンタは強烈だった、とも」

「ああ、そうですね」早坂が知りたいのはそこではない。「他に何か、言つてました？」  
「仲直りする気はないのか聞いたのですが、あなたのお出幕ではない、と言われてしまいました。そこからはあまり突っ込んだことは聞けずじまい。うまく逃げられましたね」

早坂は目を伏せた。付き合えるかどうか以前に、関係を修復できるかどうかがまず問題になっている。

「熱海、あなたも来るんでしょう？」

「やっぱ、そうなりますよね」普段の関係がただのクラスメイトである以上、熱海旅行だけがチャンスであると言える。

「うまく誘導するわ、二人になれるように」

「あのですね、人のこと手伝つてる場合ですか？」早坂はかぐやにも素直になつてもらふことにした。不公平だからである。「さつきから思つてましたけどね、いつまでそこに

いるつもりなのー?とか、どの口が言ってるんですか」

「どういうことかしら」かぐやはとぼけて見せる。

「会長と書記ちゃん、くつつくように仕向けますよ?」

常軌を逸した速さでかぐやは早坂の顔を見た。正気か、と言いたげな顔をして目を丸くしている。白銀が絡むとすぐに天才らしからぬ反応を見せるかぐやが、早坂は好きだ。

「かぐや様も素直になりましょうよ」

「なんの、ことでしょう」声は震えている。

「ズルいですよ、かぐや様。あなただけ隠し通そうとするなんて」

かぐやはだいぶごねたが、最終的には困った顔をして「わかったわよ」と頬を赤らめた。

二人の恋愛相談は夜遅くまで続いた。明日が休日であることが二人の気を緩めたのだろう。結局、二人は並んで同じベッドで眠りについた。

彼はそれが夢だと気づいた。だって窓の向こうの庭で、葵が小さな手を振っている。妹を挟んで両親が立っていた。みんな笑顔だ。懐かしいな、と思う。

母の趣味はガーデニングだった。広大な庭だったから一人でやるのは大変だったろう。けれど楽しそうだった。庭の話をするといつもにこやかに語り出すのだ。去年芽を出さなかった球根がさつき見たら育っていたよ、とか。手を入れるところは入れて、自然に任せるところは任せるのが彼女のやり方だった。その結果、リビングの窓からは過度に整えられすぎている自然が臨めた。

家を建てた日に貫ってきたという檜の木が日陰を作っている。そこへ枝葉の合間から光が降っていた。三人はそこに立っている。三人は当時の姿のままだった。親は若く、葵は小さな少女のまま。ガラスに反射した自分だけが、歳をとっている。

きつと夏だ。彼はそう思った。しかし蝉の声はしない。窓の向こうからはなんの音もしなかった。

彼は鍵を開ようと手を伸ばした。三人と話がしたい。

俺だけ生き延びてごめん。

もう疲れていた。考えるのを止めて、眠りたかった。

眠気が心地いいのは、きつと寝ている状態が正常だから。

意識がない状態が正常なら、生きていることは不自然じゃないのか。

生きている、という病。だから生まれたときに赤ん坊は泣くんだろう。ずっと、眠っていたかかったのにつて。

異常であり続ける意味はなんだ。

脳裏に浮かぶ生者の顔はない。しかしやらねばならないことはあった。

鍵にかけた指を引っ込める。まだ早い。

母親と目が合い、彼女の口がゆっくり動いた。

なんて言っているか分からなかった。

「見ていて」

そう答えて目を閉じた。夢はもういい。あとでいくらでも浸れる。

息を止める。

有限に挨拶をする。彼は道留と名乗った。

呼べるものなら僕の名前を呼んでみて。

誰か呼んで。

中指を喉の奥へ入れ、胃の中身を足元へ広げる。

吐瀉物は曼荼羅に似ていた。

不快さが体を食べていく。

病が全身へ転移していくように。

こうして彼は目覚める。夢から戻る方法を知っている。

○

「あゝ！ やつと起きた！」

目を覚ました道留をまず迎えたのは藤原の愉快な声と新幹線の薄い走行音だった。熱海へ向かう新幹線の中だと思ひ出す。

「ごめん、そんな寝てた？」 目をかきながら尋ねた。

「一時間半くらい？ 乗ってからずっと寝てたよ」 藤原が時計を見て答える。

「じゃああと三十分くらいか」 言いながら窓の外を見る。地名はわからなかった。

「四宮はもう着く頃か」 白銀が言った。

かぐやは新幹線に乗る他のメンバーとは別で一足先に車で現地へと向かっていた。彼女の家は新幹線よりも護衛車付きの高速道路の方が安全だと判断したらしい。

旅行まではあつという間だった。何も無かった訳では無い。藤原と道留がせつせと

旅行を計画する横でかぐやと白銀は業務をこなした。

その間、その二人は例のごとく頭をはたらかせて遠回りを続けていたし、道留は一人の彼女と別れ二人の彼女を作った。

「凄いい別荘なんでしょうね」石上がボソリと言う。「めっちゃや広そう」

「確かに」道留はペットボトルの蓋を回しながら言った。「楽しみだな」

「藤原はこの旅行、何を一番楽しみにしてる？」白銀がずっとにまにまにしている藤原に聞いた。

「やっぱり海ですよ海！熱海のプライベートビーチですよ!？」

「海、か……」

白銀が複雑な顔をして言った。彼が泳げないのは知っている。海水浴にはあまり乗り気でないのだろう。その一方でかぐやの水着姿を拝める。そういう複雑さだろう。

「海ねえ」道留が小さくつぶやく。

海は嫌いだ。

○

波音が海面を駆け回る太陽光と共に、砂浜を満たそうとしていた。その隙間を縫うよ



うに藤原とかぐやの楽しいげな声が道留のいるパラソルの下まで聞こえてくる。石上と白銀は波打ち際で砂の城の大規模建設に取り組んでいた。

この旅行を企画してよかった。彼らの笑顔（と藤原の水着姿）を見て、道留は心からそう思った。藤原のたわわは、かぐやの前で踊り狂っている。

普段ならば巨乳への嫉妬で偏差値が3になるかぐやも、みんなで旅行という状況ではそんな心の隙間などないのだろうか。彼女も笑顔で波打ち際で藤原とじゃれあっている。

願わくばかぐやと白銀が距離を縮める、というよりも、素直になるきっかけになって欲しい。イベント尽くしの三日間だ。あんなふたりでも、もしかしたら……。

「泳がないんですか」と後ろから早坂の声がした。

体を捻って後ろを見てみると、彼女はこちらに背中を向けて座っていた。暑苦しそうな執事服を身につけている。早坂が話しかけてきたのに驚きはなかった。遅かれ早かれこうなると思っていから。

彼女は男装して旅行に参加していた。藤原の目を欺くためにはそうするしかないのだと、以前聞いた覚えがある。

「泳げなくてね」

「体の傷、見せたくないんですか？」

久しく話していなかったから臆気になっていたが、彼女は中々に鋭い。いつまでもTシャツを着ていることと飛行機事故を関連付けて泳げないのが嘘という結論に至ったのだろう。彼が無言でいると彼女は続けて口を開いた。

「行けばいいのに。誰も気にしないと思いますよ」

「余計なお世話だよ」

そう言うのと彼女は話さなくなった。夏のビーチで古傷の話は重すぎるから、それでいいと道留は思った。

「そう言えば藤原の前では早坂のこと、なんて呼べばいいの？」

「ハーサカ君、お願いします」

「大変そうだな、相変わらず」

「仕事ですから」

俺との仲違いを彼女はどう処理したのだろうか、と道留は考えた。こういう人間もいるだろうと寛大な心で許容されたのだろうか。気になったがこういう話題を今出すのは悪手だとわかっている。

悪手？ 何において？

答えを探す思考は早坂の発言によって断たれた。

「かぐや様たち、この旅行で進展すると思えますか？」

「難しいだろ。今まで散々お膳立てしてきたのに成果無かったからな」彼は現実的なことを言った。

「でしようね」

眺めていた砂の城の一部が大きく崩れた。現場の二人はてんやわんやだ。楽しそうだが、と思う。混ざろうと思ひ、立ち上がろうとして、やっぱりやめた。

「行かないんですか？」

「うん」

「どうして？」

「どうしてかな……」あまりよく考えなかったのが本音である。そのはずだ。

藤原が遠くで手を振っている。それに応えた。

○

早坂は四宮が海から上がるのを見ると、キッチンで料理を始めた。

この旅行に帯同した四宮家の人間は、ボディガードが2人と早坂の三人だけだ。シェフがいないので、食事の用意は彼女の仕事だった。

野菜の皮を剥き、切る。数が多いので単純な作業をしばらく続ける必要があった。単

純作業にはいつも、雑念がするりと思考へ入り込む。

恋に落ちている状態では、相手の言葉の全てが、行動の端々が、自分の感情を鋭敏にさせる。期待したり焦ったり、とにかく、心が勝手に動き回る。

彼が白銀と石上の遊びに混ざらないのは、自分が行けば私が一人になってしまうのを気にしてではないか？例えばそんな期待。

傷なんてきつとみんな気にしないと善意で言つたつもりが、余計なお世話だと返された。彼に嫌われたかもなんて、そんな焦り。

パラソルの下での会話は少なかつた。どんな話をしていいか分からなかつたし、彼も話題をほとんど振らなかつた。

つまらない女、と思われただろうか。話してて楽しい女がモテる、というのはよく聞く話だ。実際、彼が遊んでいる女の子たちも明るくて楽しそうな雰囲気の子ばかり。

彼の好みに寄せるべきなんだろうかと思う。けれど、そうしたくない自分がいることに気づいた。

自分も主人と同様にプライドは高いらしい。

ため息をつく。そんなことを言っている場合ではないのだ。この旅行で何も関係を発展させることが出来なければ、今後彼との関係はただのクラスメイトへと落ち着いていくことが予想させた。お互いの秘密を共有していても、それは変わらない。

彼女は作戦を練ろうとする。まずは確実なところから基盤を作るべきだ。

顔がいいと思ってくれているのは事実だ。過去にそう言っていた。

……いや、あれが世辞だった可能性は充分ある。ただのコミュニケーションの一環だったのかもしれない。

自分の見た目には自信を持っていたはずなのに。自分の最大の武器だったはずなのに。

彼にそれが通用するのだろうか。そんな不安が美しさから由来する力を疑わせた。

積極性を失ってはダメだ。彼女は一度思考をストップさせ、再起動を試みた。ぎゅつと目を瞑り、整理して、開く。

私が平均よりずっと、優れた美貌を持っていることは客観的な事実だ。顔だけでなく、スタイルも含めて魅力的なものだ。だからこれは武器になる。

これを生かした戦法をとればいい。

私が彼に恋心を抱いているということは知られていない。どうせ彼のことだから可能性のひとつとして記憶領域に保管されているだろうけれど、もつとも可能性の低い仮説として埃を被っていることだろう。

早坂愛が自分に付きまといてくるのは、パーソナリティが似ている人間を見つけ理解し合いたいから。そのような解釈を彼がしているのならば、そこが弱点だ。

自分に恋愛感情など向けていない思っていた女、それも顔もスタイル良い女からの急激なアプローチ。これを軸に詳細を練り上げていこう。

二人きりになる環境を作らねばならない。幸いにもこの別荘には各々に部屋を貸してもまだ余るほど、多数の部屋がある。かぐやと藤原、白銀と石上は広めの部屋に二人で寝るらしいが、道留は寝るときくらいは落ち着きたいからと、一人部屋に寝ることになっている。

彼の寝室へ行けばいい。単純なことだ。あとはその時間をいつ、どれだけとれるからだ。

そう思ったときに、包丁を持つ自分の手がいつからか止まっていたことに気づいた。仕事は全然終わっていない。

時計をちらりと見て、彼女は必死に野菜を刻んでいた。

彼女の恋愛頭脳戦はもうすぐ始まる。

○

夕飯はカレーだった。白銀はルーに絡めた白米を口へ運ぶ。執事のハーサカ君が一人で作ったものらしい。この人数のものを一人で調理するのは大変だったろう。

本人を労いたくても、彼は自室で一人で食べるそうだ。明日は手伝おうと思う。

「美味しいな」道留がぼやく。

「習った方がいいんじゃないか？お前自炊全然ダメだから」白銀が言った。

「嫌だ。料理は女の仕事だ」

彼の思想たつぷりの発言（冗談なのはわかっているが）に全員から口々に指摘が入った。

「先輩、その昭和的考え方はちよつと引きます」と石上が言えば、「主夫って言葉ももうあるんですよ」と藤原が言う。

「俺だって男だけど、当たり前のように料理するぞ」と説得にかかると、「そうですよ！会長みたいに料理できた方が素敵です！」とかぐやが言った。

会長みたいに料理できた方が素敵……？

唐突に白銀の頭脳戦が始まった。

何故、普段は見せない隙を晒したのか。これは彼女の策なのか？いや、旅行という非日常感が、彼女を油断させたのだろうか。わからない。少しつかないとわからない。

「ほう、四宮も料理できた男の方が素敵だと思うのか」

四宮もその方がいいと言ってるんだから料理くらいしなよ、と道留を説得する。これはそんなオブラートで包んだ発言だ。しかし同時に、自分の話したい内容へつなげる意

図のある質問だ。

「ええ、そうですね。やはりこの時代、そういう殿方には好印象を覚えます」

四宮の表情にゆらぎはない。さて、次はどういう手を打とう。彼が電光のような素早さで答えを求め、口を動かそうとしたとき、先に道留が発言した。

「白銀みたいに?」

道留のナイスパスだった。白銀から「俺みたいにか?」と言うことは不可能。故に彼が言う必要があつた。

「ええ、会長みたいに食費をやりくりしながら料理をする方は、男女問わず、人として尊敬できます」

ああ逃げ切られた。彼らの間には、このような恋愛小競り合いが頻発している。道留が加担することも多くなつたが、敵になることも同じくらいある。結局のところ、彼の目的は俺たちをくつつけることであつて、その過程にこだわっていないんだろう。白銀はそう思っている。

「だつてさ、道留。頑張れ」彼は少し脱線した話を戻してごまかした。

「はいはいごめんなさい」反省している様子はない。

「明日は何をするんですか?」石上が藤原に聞いた。

「山でバーベキューやる!」スプーンを片手にこやかに彼女は笑つた。



「じゃあ今夜は？まだ寝るまで時間あるけど、トランプかなんかやるの？」道留が言う。「愚問ですね。もちろんですよ」

「イカサマすんなよ？」白銀が釘を刺すと、藤原は引きつった笑みを浮かべて「しませんよー」と言った。

やるつもりだなと思いながら、そういえば道留がこの手のゲームに参加するのは、もしかしたら初めてなのではと気づいた。

運が絡まないゲームならば彼は間違いなく強いだろう。四宮の前で恥を晒さないよう、必死で食いついていかねば。白銀はそんなことを思った。

彼にとつても、この旅行は大きなチャンスである。この機会を無駄にしないために、彼は様々な策をねってここに来ていた。

あとは石上と道留の協力があれば簡単に……！

そう思つて道留の方を見やる。彼は何かを察して親指を立てた。

○

「それでは、どうしましょうかね、罰ゲーム」かぐやが口角を大きくあげて微笑んだ。「勘弁してくれよ、四宮。そんなに重くないもので頼む」白銀が言った。

生徒会一同は夕食後、入浴を済ませ白銀と石上の部屋にてトランプに興じた。各ゲームごとに順位によって得点を決め、全てのゲームが終わったときに、総合得点一位の者が最下位の者に対する罰ゲームを決める、というルールの上で、だ。

そして今、一位がかぐや、最下位が白銀という結果になった。これは白銀陣営の策略によつてもたらされた事態である。

しかしもちろん、当初は白銀が一位になりかぐやがビリという状況を目指していた。だがかぐやを最下位に蹴落とすのは流石に厳しかったのである。

かぐやに攻撃の機会を与えることは危険ではあるが、三人でそのカウンターを狙えばいい。プランBとして事前の会議でそう決まっていた。

しかし道留はそのままかぐやに攻めさせて、二人をくつつけるという腹案を持っている。

「うーん、悩みますね。罰ゲームですか」かぐやが微笑んで言う。

どうせこの人の事だ、とづくに内容を決めているだろう。道留はそう考える。では何故、悩んでるフリをしている？その罰ゲームを告げるのを躊躇しているのか。あるいは悩んでいるというアピールがしたいのか。

どちらにせよ、大規模な攻勢へ出ることは間違いない。

「では、この質問に答えてください」

「質問？」 白銀が目を細めた。

「会長つて恋愛してますよね？ 誰のことが好きなんですか？」

やりやがった！ 道留は思わず拳を握りしめる。事態が大きく動くことが彼にはわかった。

例えば恋愛に興味ないなどという回答。これは白銀に告白しない理由を与え、いずれ白銀は告白せざるを得ない状況に追い込まれる。

一般に恋愛に興味のない人間に告白しても振られるのは明白。そうとわかっていてかぐやから告白するのは不可能。ならば白金自身が想いを伝えるしかない。いずれこのようになる。いわば遅効性の毒だ。

好きな人はいない。こう答えてもやはりかぐやが告白しない理由になってしまう。

人間的に好きな人を答えるという誤魔化しも通じないだろう。

しかし他の選択肢を白銀は持たない。かぐやが好きだと告げるのも、別の人が好きだと告げるのも白銀にとっては論外だ。

さあ、どうする白銀。道留は白銀を見る。ポーカーフェイスを必死に貫いているが、わかる人間にはわかる。彼は動揺している。動揺したら負けだ。思考をそちらに割かねばならないから時間がかかるし、そもそも適切な答えを導けるかも危うい。

白銀がゆっくりと道留を見る。明らかに助けを求める目だ。

さて、この状況で彼を助ける方法が一つだけ存在する。白銀もその方法に気づいたのだろうか。

が、道留はあえてそれを実行しない！彼は恋愛頭脳戦に決着がつけばそれでいいのだ！勝ち負けなんてどうでもいい！

「それ気になります!!学校の人ですよね!」藤原が身を乗り出した。

彼女のテンションによって黙っていられない雰囲気形成されていく。

「い、いや、急にそんなこと聞かれてもだな」しどろもどろな返答を白銀はした。そもそも何故俺に好きな人がいるという前提になっているのかと、自分からは言えない。退路がなくなるからだ。

「いいじゃないですかあ会長」と藤原。

「そうだぞ。罰ゲームだしなこれ」と加勢する道留。

「そうですよ会長。俺も気になります」まさかの石上の発言。

お前もどつちが勝つても良い派閥だったのかと道留が思ったときだった。さらに石上が続けた。

「——誰かっつのがどうしても無理なら、好きな人がいるかどうかだけでいいんで」

やられた。助け船を出された。

「そうですね！そこだけでも教えてくださいよお〜」

道留は舌打ちを堪えた。が、隣からチツと小さく聞こえたので見てみると、かぐやが冷徹な笑みを浮かべていた。

石上は話をすり替えたのだ。誰を好きなのかという質問から、好きな人がいるかどうかという質問へ。これに藤原が乗ってしまった。二人の影響で、好きな人の有無だけ答えてもらおうというのが、場全体の流れになった。

これが厳格な会議の中なら軌道修正も可能だろう。

しかし、今ここでいちばん大切なのは場の雰囲気である。この楽しい空気感、そして流れを壊すことなく、恋愛頭脳戦は行わねばならない。

ここでかぐやが、罰ゲームを設定する権限は自分にしかなく、罰の変更は不当なものだと主張すれば、場の空気は盛り下がる。別に細かいことはいいじゃんか、となる。それに、そんなに必死になるのは不自然だから、帰って墓穴を掘りかねない。

だから、かぐやは石上の行った質問のすり替えを看過するしかない。そうなれば簡単だ。好きな人はいると答えればいい。それ以上は聞かれないうし、かぐやが白銀に告白する障壁にはならない。

このすり替えこそが道留が唯一白銀を救う方法だった。まさか、石上がそれをやるなどとは道留は思っていなかったわけだが。

「好きな人、か」白銀が言う。「まあ、いるけどな」

藤原が盛大な歓声をあげた。普段のキャラクターからして不自然なので道留も仕方なくはやし立てる。石上も芝居を打っていた。案外器用なヤツだと道留は思った。

かぐやは笑顔を張りつけている。おっかなかったので、道留はかぐやの方を見ないようにした。明日、石上は酷い目に合わないだろうか。そんな心配を柄にもなくした。

「まだ寝る時間じゃないですね」罰ゲームでの熱が一通り冷めた頃、藤原がそう言った。確かに寝るにはまだ早いか。時計を見た道留は藤原に同意する。

「まだ起きているなら、飲み物を持ってきてもらいましょうか」かぐやが人差し指を立てて言った。

「確かに、お願いしたいな」白銀が頷いた。

かぐやが携帯を操作してしばらくするとドアがノックされた。ガチャリと扉が開き、（早坂扮する）ハーサカくんが入ってくる。

「失礼します。この辺りで採れたみかんを搾ってジュースを作りました」

「おぉー」白銀の顔がほころぶ。

見ればトレイの上にコップが人数分置いてある。ハーサカは、一人一人にコップを配ってまわった。白銀に配られたコップを見ると、鮮やかなオレンジ色の液体が目を引きつけた。

絶対美味しい。道留はそう思いながら自分の分を待っていた。そのときである。ハーサカが何も無い所で足を滑らせた。コップは宙を舞い、そしてその中の液体は道留の頭頂部へ降り注ぐ。冷たさとみかんの甘い匂いを感じた。

「申し訳ございません！」ハーサカが頭を下げる。

「いや、仕方ないけど……」道留が言う。

あの早坂がこんなミスをするのかという一抹の疑念はあったが、ミスをしない人間などいないのも確か。いや、しかし四宮のメイドが？

早坂はハンカチを取り出し、この大惨事をどうにかしようとする。困り眉で道留の顔を拭く。

「これはもう一度お風呂に入った方がいいかもしれませんね」かぐやはティッシュで床を掃除しながら言った。

道留はそれに同意した。

○

トランプをやる前。道留は大浴場ではなく、自室のシャワーで入浴を済ませた。体の傷を石上と白銀に見せたくなかったからである。

だが、大浴場を独占できる今は違う。広い浴槽と目の前に広がる海を堪能していた。半露天風呂とでもいうのだろうか。屋根のあるバルコニーのような所に風呂がある。暗くて景色はほとんど見えないが、波音はここまで聞こえる。それが心地よかった。

ジュースを浴びせたのがもし故意なら、自分にこの風呂を堪能して欲しかったのかもしれない。頬を叩いた償いのつもりだろうか。そんなことを考える。

今日は楽しかった。けど後ろ髪を引かれるほどではない。何があっても学校を辞める。彼らとの関係は絶たなければならない。

なんでこんなことを考えている。ほっとしているのか、残念がつているのか、どちらだろう。

彼らが自分の決断を曲げさせるほど大きな存在ではないこと。これを自分はどう評価しているのだろうか。

結論を出したくなかった。

突然、ガラツと背後の引き戸が音を立てた。

白銀が一人でいる俺を氣遣って入ってきたのだろうか。あるいは石上とセットか。ありがたいがお節介だ。体の傷を見られたくない。それに散々ひとりが好きだと今までアピールしてきたじゃないか。

彼をどう拒もう。そう思いながら振り向いて、タオル一枚だけ身につけた彼女の姿



に、目を見開く。

「……何してんだよ、お前」

早坂が答える。

「あんま見ないでもらえますか？」